

大県・大県南遺跡

—下水道管渠埋設工事に伴う—

1986年3月

柏原市教育委員会

は し が き

柏原市は、毎年、大小各種の規模の公共事業を実施しています。市域の大部分が文化財の包蔵地である事から、公共事業に際して発掘調査を実施する事例も多くあります。

これらの公共事業は、田畠や山林等を新規に工事するだけではなく、既設の施設改修や改装、拡張等の調査面積が狭小な場合も多々有ります。柏原市教育委員会では、これらの工事に際してもおごそかにする事なく出来る限り発掘調査を実施し、鋭意各遺跡の実態把握に取り組んでいます。これらの発掘調査による成果は、大規模な発掘調査によるものとは程遠いものがあります。しかし、少量ながら検出した遺構や遺物から遺跡の種類や性格、規模等の一端を知る事が出来、古環境復元に際して重要な資料となる事があります。

今回の調査も狭小な調査面積しかない事例でしたが、種々の遺構や遺物が検出できました。大県遺跡では、府下9例しか出土していない縄文時代早期の押型文土器が出土し、中期から後期にかけての土器も貴重な資料です。大県南遺跡では、鍛冶関係の炉が検出され、大県遺跡だけではなく、大県南遺跡でも製鉄関連集団が居住していた事が明らかになりました。

今回の調査にあたっては、地元の方々を始め、柏原市下水道課ならびに調査関係者各位に種々な御協力をいただき深く感謝の意を表します。

昭和61年 3月

柏原市教育委員会

例　　言

1. 本書は、柏原市教育委員会が柏原市公共事業（建設部下水道課担当）に伴なって実施した大県・大県南遺跡の事前緊急発掘調査概要である。
2. 発掘調査は、柏原市教育委員会社会教育課 北野 重を担当者として、大県84—5次調査区、昭和60年1月9日から同年1月16日、大県84—6次調査区、昭和60年1月17日から同年1月21日、大県南85—1次調査区、昭和60年2月6日から同年2月22日まで実施した。
3. 調査の実施及び本書の作製にあたっては、多くの方々に参加及び協力を頂いた。ここに記して感謝の意を表します。

石田 博	竹下 賢	安村俊史	桑野一幸	田中久雄
石田成年	仲井光代	谷口京子	秋田大介	伊藤泰臣
森田好則	松村富子	藤本直美	中田ゆかり	江波佐知子
坂本道子	乃一敏恵	松村早苗	横関勢津子	吉居豊子
村口ゆき子	飯村邦子	竹下真紀	(順不同・敬称略)	

4. 実測中に表示した方位は磁北、標高はT.P.である。
5. 本書の編集・執筆は北野が行なった。
6. 本書作製にあたっては写真、実測図などの記録を作製するとともに、カラースライドを作製した。また、出土した遺物は柏原市教育委員会で保管するとともに柏原市歴史資料館で展示している。

目　　次

第1章　調査に至る経過.....	1頁
第2章　調　　査.....	3頁
大県84—5次調査区.....	3頁
大県84—6次調査区.....	11頁
大県南85—1次調査区.....	17頁

第1章 調査に至る経過

下水道管渠埋設工事は、大和川以北の地区では、生駒西麓から流れ出る雨水や下水を北側から山ノ井川、谷山渓、宮山渓、岩崎谷等の各水系によってそれぞれの規模の下水管を埋設するのであって、主に恩智川に流れ込ませようとするものである。

昭和55年度から主要幹線の工事を着手し、本年度でその大部分を終了する事となった。今後は、各幹線の下水道管に接続する小枝管の下水道管の整備も多くなると予想される。主要幹線の工事に際して事前に実施した調査は、大県遺跡、大県南遺跡、太平寺・安堂遺跡内に含まれるもので、各遺跡共に重要な成果を得ている。

生駒山地は、花崗岩の軟質な土質である為、古代から土砂の流出が激しく遺跡全体に厚く堆積している。よって遺跡深度が深く3~5mに及ぶ掘削が必要であり、調査に際して多くの障害が生じた。しかし、調査関係者や地元の各位から多分なご理解とご協力をいただいた事から貴重な資料の収集と遺跡の環境復元に大きな成果を得た。ここに記して謝意を表します。

大県遺跡 所在地 面積 調査日 担当 概要

81-8	大県4丁目91~213	299m ²	82.1.25~2.9	北野	古墳時代から奈良時代に至る遺物包含層を検出する。
82-9	大県4丁目	196.2	83.1.22	花田	6世紀の鍛冶関係遺構と遺物を多数検出。
83-1	平野2丁目16-8	160	83.1.30~3.5	花田	縄文時代、弥生時代、古墳時代の遺構と遺物を検出。
83-2	大県4丁目	126.0	83.3.12~5.12	北野 桑野	弥生時代、古墳時代の遺構と遺物を検出する。
84-5	平野2丁目17先	39.32	84.1.9~1.16	北野	本書3頁参照。
84-6	平野2丁目11先	48.0	84.1.17~1.21	北野	本書11頁参照。

大県南遺跡

81-2	太平寺2丁目1-2	352	82.1.8~2.18	北野	古墳時代から奈良時代に至る遺構と遺物を検出する。
83-1	太平寺2丁目2	75.8	83.2.7~3.5	北野	古墳時代から奈良時代までの遺構と遺物を検出する。
83-2	大県3丁目510-1	114.3	83.3.31~4.7	花田	古墳時代から鎌倉時代までの遺構と遺物を検出する。
83-6	大県3丁目509-1	142.8	84.11.22~85.4.23	北野 桑野	古墳時代から奈良時代までの多量の遺物を検出する。
85-1	大県3丁目509-1	168	85.2.6~2.22	北野	古墳時代の遺構と遺物を検出する。

安堂遺跡

81-6	安堂町964-1	110	82.3.1~3.15	安村	古墳時代から奈良時代までの遺構と遺物を検出する。
------	----------	-----	-------------	----	--------------------------

表-1 下水道関係主要調査一覧表



図-1 調査区位置図

第2章 調査

大県84—5次調査区

- ・調査地区所在地 柏原市平野2丁目12番地
- ・調査期間 昭和60年1月9日～1月16日
- ・調査面積 40.0m²

第1節 調査概要

大県遺跡は、柏原市平野、大県一帯にかけて所在する複合遺跡である。生駒山地南端の西麓部には、東大阪から八尾市にかけて多くの遺跡が南北列に点在しており、当遺跡もその続きで同様の立地条件を持つ遺跡であり、当地域周辺で生駒西麓に位置する遺跡——北側から、山ノ井遺跡、平野遺跡、南側では、大県南遺跡、大平寺・安堂遺跡等の中では、その基幹となる様な大遺跡である。遺跡の大部分が住宅地である為、これまでの調査も少なく、家屋の建替えや道路内の埋管工事に際しての発掘調査を数例教える程度である。

今回の調査は、昭和59年10月、柏原市建設部下水道課から土木工事等における埋蔵文化財包蔵地の発掘通知書が提出され、柏原市教育委員会が調査依頼を受けて、昭和59年12月13日試掘調査を実施した。試掘調査は、人孔部分3ヶ所に試掘トレンチを入れて行なった。各トレンチとも遺物包含層が確認され、縄文時代から中世に至る遺物が出土した。この結果を踏まえ、再度協議し、全面調査する事になった。

調査区は、狭い道路（約1.5m幅）であり、安全上及び周辺住民の利用度が高い事から1日に出来る範囲の調査を実施し、その日の内に掘削、調査、埋戻しを行なわねばならなかった。

よって、調査は、幅0.9m、長さ2～3mのトレンチを20ヶ所近くあけた。この事から遺構について検証も明確に出来ず主に遺物の採集とトレンチ断面の観察を主眼とした。

縄文時代早期の土器（押型文土器）は、昭和57年度大県82—4調査において出土し、大県遺跡では2例目を数える。当調査区とは約100m程離れている。

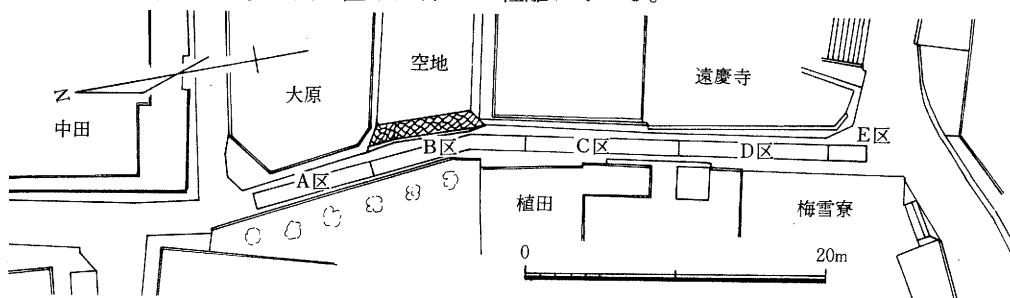


図-2 調査区位置図

第2節 調査

調査は、南北方向に伸びた道路の中央部を約90cm幅のトレンチを全区間掘削した。北側からA～E区に地区設定した。

A区では、最上層は、道路面から旧表土まで約20cmのアスファルトと敷砂利がある。E区まではほぼ同一厚さを測る。その下層に茶褐色粘質土が約25cmの厚さで続いている。この土層から須恵器と土師器が出土した。この土層掘削後に遺構状の落ち込みを検出した。南北80cm、深さ15cm、埋土上層は、茶灰色粘質土、下層は、赤茶褐色を呈した焼土と炭層である。埋土中須恵器と製塙土器が出土した。

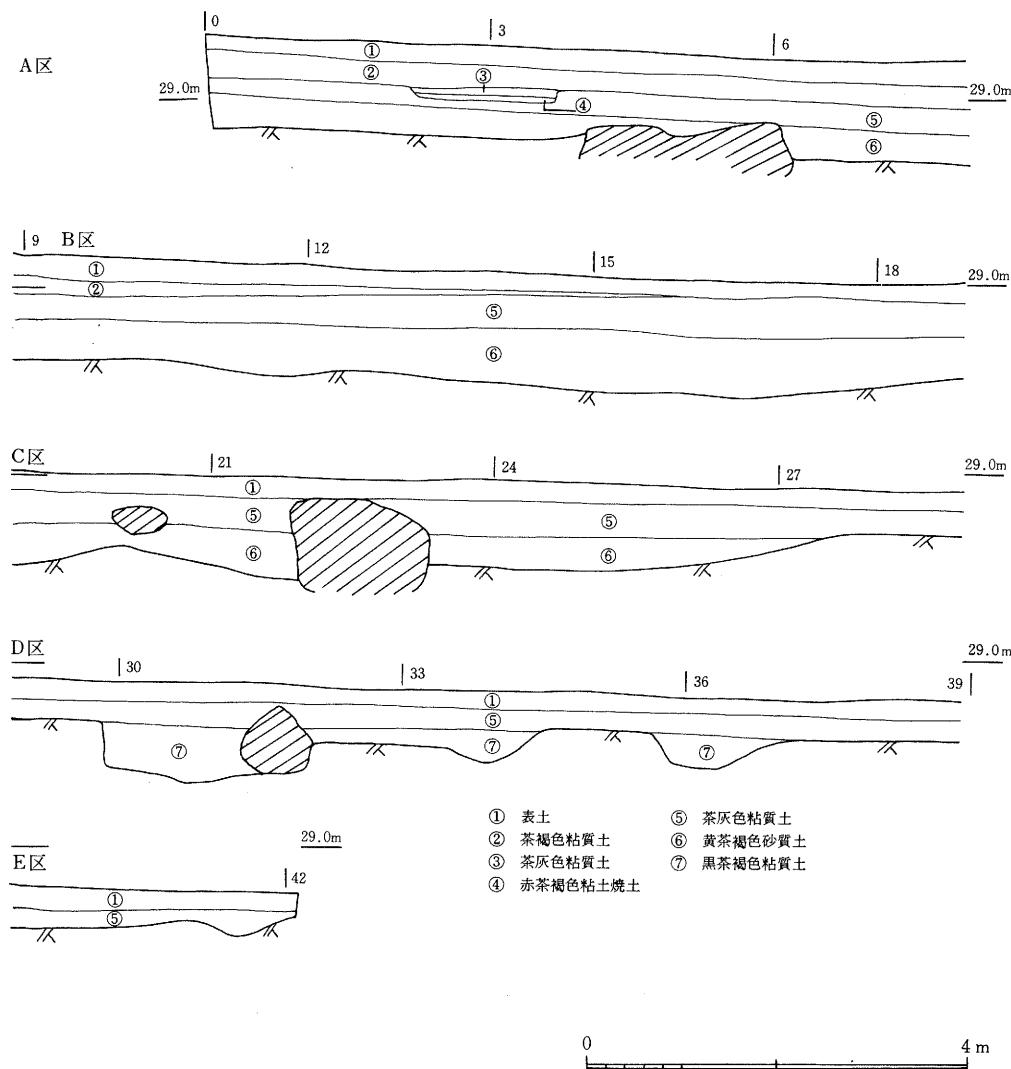


図-3 トレンチ断面図

その下層は、茶灰色粘質土である。古墳時代から弥生時代の遺物包含層である。最下層は、黄茶褐色砂質土である。約40~50cmを測る。埋土中、サヌカイト石器と縄文時代早期の押型文土器が出土した。B区では、茶褐色粘質土が中程で自然消滅している。恐らく道路の造成時に削平したのだろう。下層は、茶褐色粘質土で、古墳時代から弥生時代の包含層である。最下層は、黄茶褐色砂質土である。サヌカイト石器が出土した。C・D・E区も同様の層序である。C区の茶灰色粘質土、D区の黒茶褐色粘質土は弥生時代の遺物包含層である。何らかの遺構となる可能性があるが、明確に出来ない。E区上層の擾乱土から縄文時代早期押型文土器が出土した。

第3節 遺 物

出土遺物は、縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器がコンテナバット6箱出土した。各時代ごとに略述したい。

縄文土器

縄文土器は、合計23点出土し、図示したのは8点である。時期はすべて早期（1~8）のものである。1は、口縁部を持つ破片で、外面に長惰円形押型文を横位に施こし、口縁部から3条以上を数え、模様の大きさは、出土遺物中最も大きく、長さ1.1~1.2cm、幅0.4~0.5cmを測る。口縁端部は面をもって終る。胎土は、金雲母と角閃石が多く、石英、長石等含む。色調は、暗茶褐色である。河内産。2は、口縁端部を持つもので、外面に横位の惰円形押型文があり、口縁端部に刻目を施す。模様の大きさは、長さ0.6~0.7cm、幅0.3cmと割合小さく、押圧も少なく浅い。色調と胎土は1と同様である。3は、口縁部を持つ破片で、口縁部からやや間を開けて3条3単位の斜縦位の惰円形押型文を施す。口縁端部は丸く、刻目がある。模様の大きさは、0.7~0.8cm、幅0.4~0.5cmである。胎土は、金雲母、角閃石、石英、長石を含む。色調は、やや明るい茶褐色である。口縁部を持つものはこの3点だけである。

4~8は、押型文土器の体部の破片である。模様の大きさは、0.6~1.2cm、幅0.3~0.4cmと各種のものがある。原体の復元しうるものは少ない。器形は、恐らく円錐形の深鉢となると思われ、模様の方向が横位及び縦位の2通りがある。5の模様は、大きさや構成にばらつきがみられ、回転による沈文とはみられない。8は、底部に近い破片である。体部に面があり、稜も明瞭である。恐らく回転による施文の折にできた稜と思われる。胎土は、それぞれ若干違うが、金雲母と角閃石を含む河内産のものである。

石器

種類は、石鏃、細石刃、剥片、敲石等がある。材質は、サヌカイトと珪岩、和泉砂岩である。9は、凹形無茎石鏃である。早期の土器と同一土層から出土した。重量は、約0.1gである。色調は、淡青灰色を呈する。10は、柳葉形凹形無茎石鏃である。重量は、0.2gである。10の鏃は、

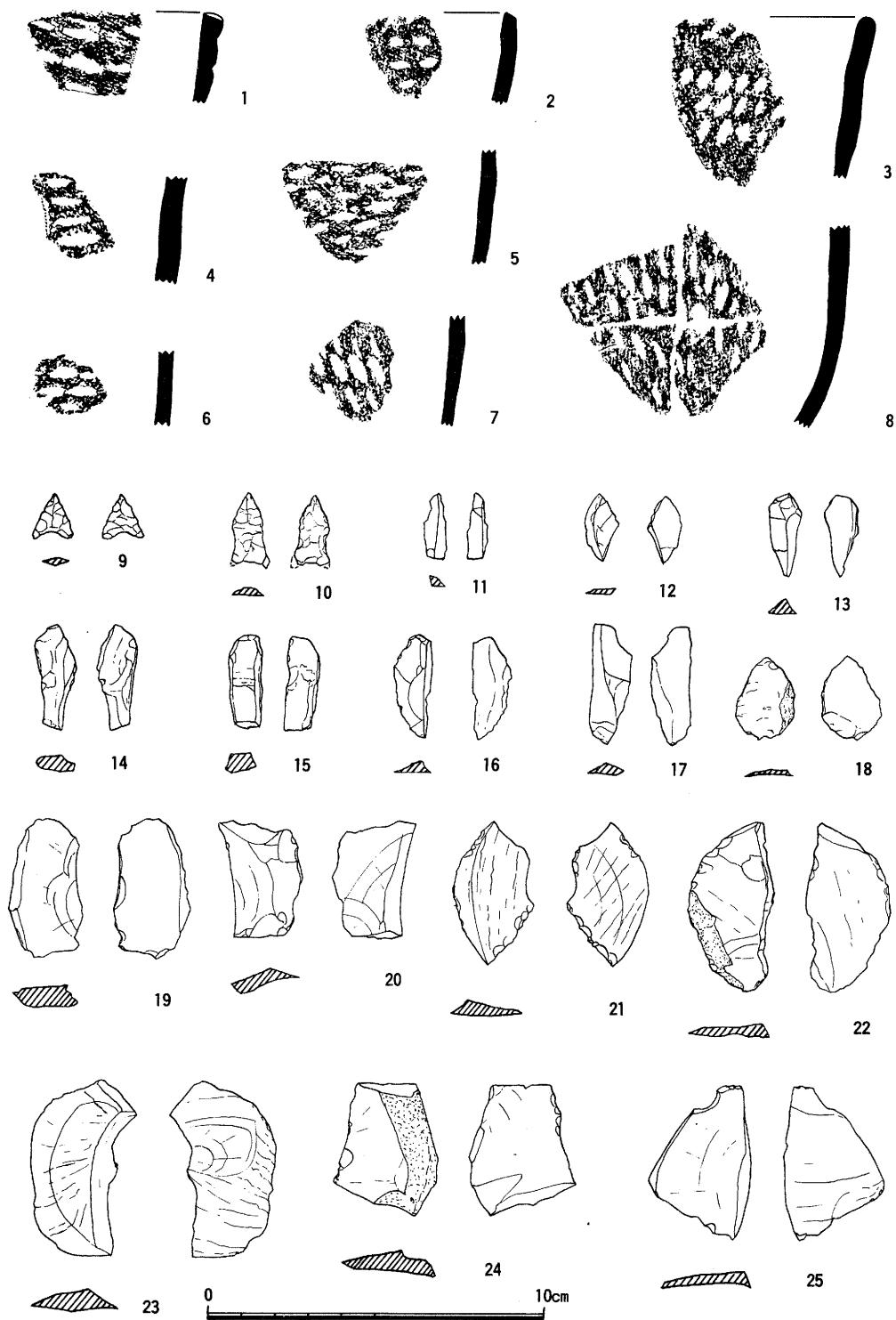


図-4 出土遺物

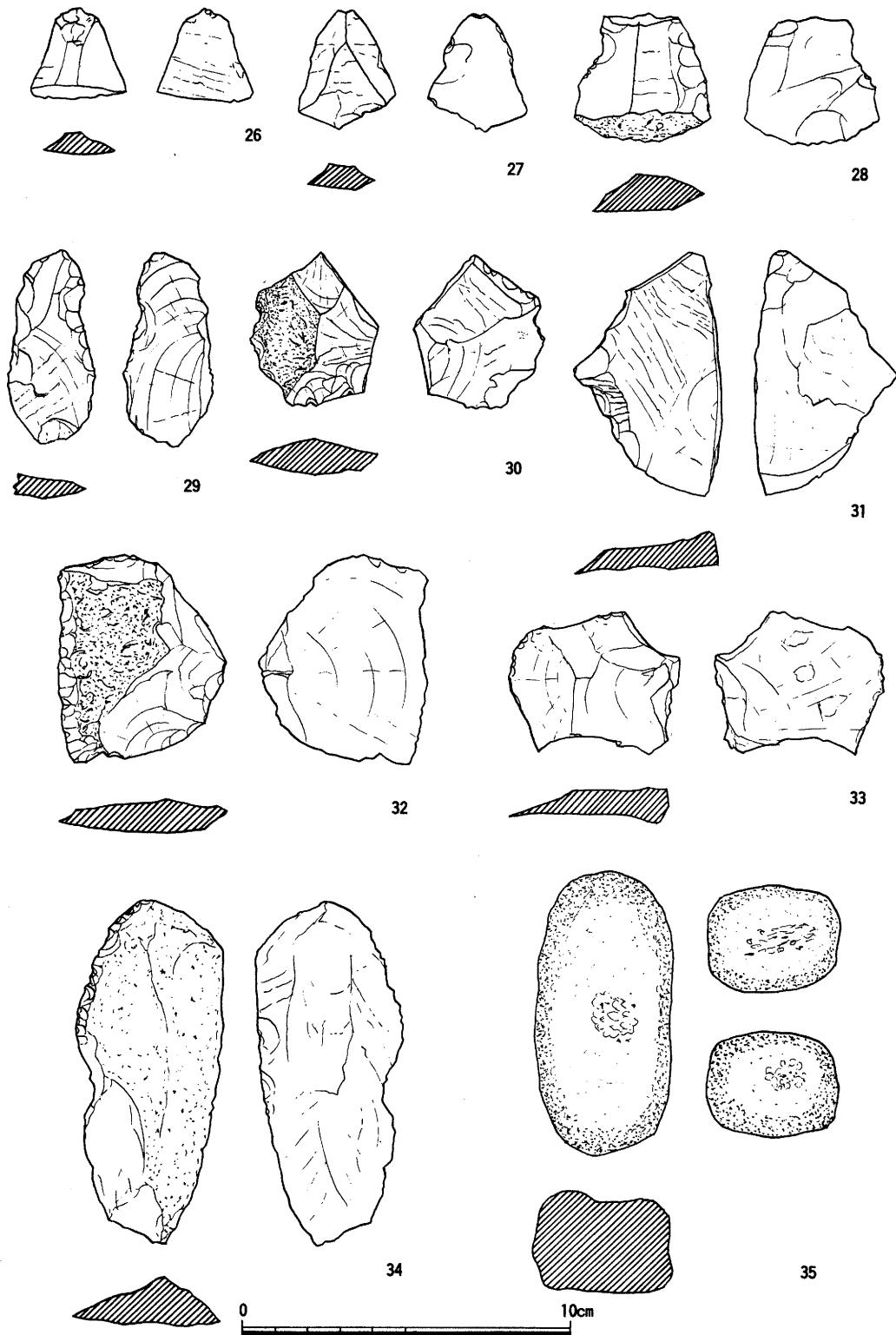


図-5 出土遺物

早期の土器より上層の包含層より出土した。この他で早期の土器と同一層から出土したものは、11~14、16~19、26~29、31である。若干出土地点が異なるが、同一土層と考えられるのは、15、20、21、23、25、34、35である。15は、珪岩で白色である。35は、敲石である。

弥生土器

弥生土器は、主に中期に属する土器が出土した。36~38は、壺の口縁部である。37は、口縁部外面に波状文、口縁部内面に列点文と頸部に簾状文を施す。38は、段状に突出させた口縁部を持つ無頸壺である。凹線文は2本である。内外面の調整は、ヘラミガキによる。40の甕は41と同一個体かもしれない。42は、高杯の脚部である。脚部外面に横列5段の竹管文と外上方に屈曲した脚部端面に刻目文を施す。胎土は、金雲母、角閃石を含む精良な粘土で、赤茶褐色を呈する。模様は、装飾に富み非常に丁寧なつくりである。43は、水平にひろげた口縁部に端部を下方に屈曲させた高杯で、外縁に一条の凹線文と上面に連続した三角形の直線文が施されている。時期は、40はやや古く第2様式で、他のものは第3様式に属する。

須恵器

種類は、杯蓋身、壺、高杯、鉢、甕がある。44は、6世紀後半、他のものは、7世紀前半。

土師器

種類は、杯、鉢、壺、甕、鍋がある。時期は、須恵器とほぼ同一である。

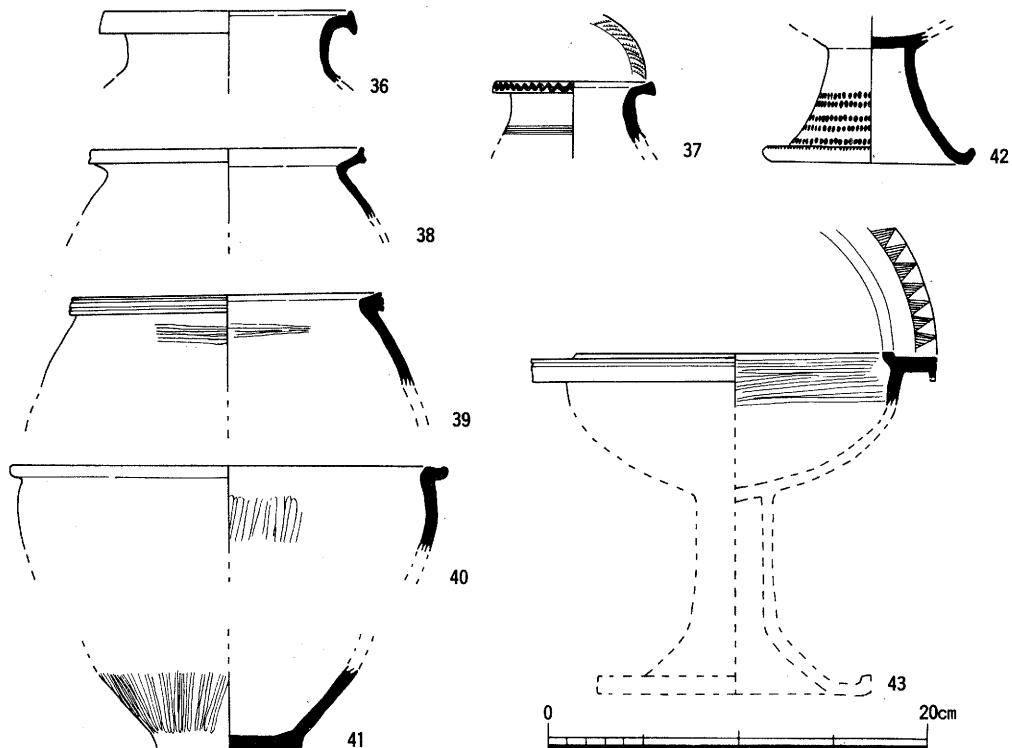


図-6 出土遺物

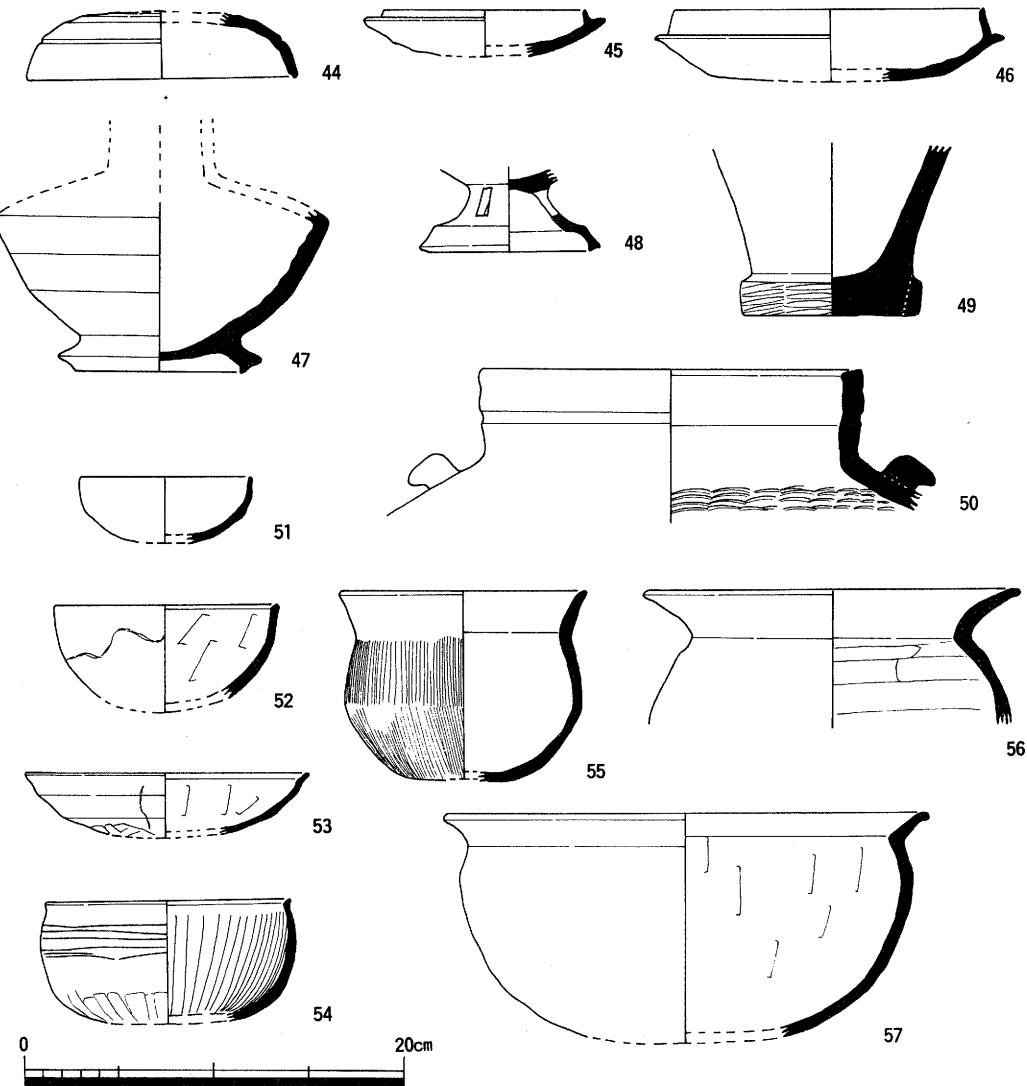


図-7 出土遺物

第4節 まとめ

今回の調査によって、縄文時代から奈良時代までの遺物が出土した。狭いトレンチである為遺構は検出されなかったが、貴重な資料を得た。

縄文時代早期の押型文土器と石器の出土は、大県遺跡の縄文時代の空白を前期だけとした。縄文時代の集落の拡がりは、まだ明らかに出来ないが、東西300m、南北200m以上の範囲に及ぶことが予想され、今後、調査の増加によりさらに多くの遺物が出土すると思われる。

遺跡の立地は、大阪府と奈良県との境に連なる生駒山地の西麓部にあたり、谷川渓から拡がる扇状地上の標高15mから20mまでの中位段丘上に位置する。現状は、住宅地が密集している。

大阪府下において押型文土器が出土した遺跡は9ヶ所である。その中でも生駒山地西麓に特に集中しており、大県遺跡はその最南端に位置する。押型文土器が出土した位置は、大県遺跡の北部域の立地的に最も安定した場所である。遺物包含層は、地表下50~200cm下層にあり、花崗岩のばい乱土が厚く堆積し、こぶし大から大きいものは径1mを越える花崗岩類を多く含み極めて良好な遺存状態を呈する。このような環境は、巨岩の片隅や山間に近い場所を好み狩猟や採集生活を営んでいた当時の生活を十分伺えるものがある。^{注1}

押型文土器と共に出土した石器は、石鎌やナイフ型石器、剝片石器の製品の他に石器製作が当地で行なわれていた事を示す多くの剝片もある。この事は、一時期のキャンプ地でなくかなり永続的な集落の可能性が想定される。

縄文時代早期の土器は、細片が多く全形を知り得るものがないが、若干の補足的な説明を加えておきたい。器形は、口縁部や体部の湾曲から逆三角錐を呈する深鉢形の尖底を成すと考えられる。器壁は、0.4~0.6cmと薄手であり器高もさほど高くならない。色調は、全部が茶褐色系統のものが占め、茶灰色を呈するものは器壁が厚く、茶褐色を呈するものの方が薄い傾向がある。両者共に当地産であるが焼成による違いではなく胎土の素性が異なる。よくみると、胎土中の雲母や角閃石の量や大きさが微妙な違いをみせる。粘土の精良なものは薄く、荒いものはぶあつい。器壁の厚い土器（器高も大きくなる）を作る為には胎土の選択が必要であったと考えられる。

口縁部の形態は、平縁のものと丸く終るもの、また、口縁端部に刻目を入れるものがある。模様は、ごく細片を除くとほとんどのものがネガタイプな橢円形沈文がみられ、器面に対して凹型である。その構成要素は8種類以上を数える。同一個体に同一原体の施文と云う事が云えないが、要素的には8個体はあるかもしれない。施文方法は、回転押圧によると考えられるが、その施文原体を復元した場合、棒軸に縦長あるいは横長に刻む2種類が認められる。縦刻原体のものは棒軸に対して垂直ではなく左右どちらかに斜傾している。口縁部直下の施文も横及び縦刻のものがある。復元しえる原体の内明確なものは、3条3単位のものが確認される。3は、原体の棒軸が、長さ2.3cm、直径0.57cmを測るものであろう。5は、刺突沈文と考えられる。

弥生時代の遺物は、主に中期のものが多い。模様を持つ土器も多く、波状文、簾状文、櫛目文、竹管文、直線文がある。当遺跡の上方にある高尾山遺跡は、高地性集落として、また、多紐細文鏡の出土地として有名であるが、43の高杯口縁部に施された鋸歯文は、多紐細文鏡の模様の系譜を引くものとして興味深い。

古墳時代の遺物は、細片であるが最も量的に多く、6~7世紀の時期が主流である。一部5世紀まで遡りうる遺物も出土している。しかし、大県遺跡から多量に出土する鍛冶関係遺物が当地点周辺から出土せず、鍛冶関係専門集団の居住地が当地以南である事が考えられる。

注1 下村晴文 東大阪市文化財紀要Ⅰ 神並遺跡出土の押型文土器

大県84—6次調査区

- ・調査地区所在地 柏原市平野2丁目11-28
- ・調査期間 昭和60年1月17日～1月21日
- ・調査面積 48.0m²

第1節 調査概要

大県遺跡は、柏原市平野、大県にかけて所在する遺跡である。立地は、生駒山地西麓の緩斜面地から、恩智川までの狭小な範囲に所在する。この生駒山地西麓には多くの遺跡が見られ、南北方向に点在している。同様の立地ではあるが、北側程、標高の高い山が多くその山麓は広く伸びている。南側はその反対に、割合低い山が多く緩斜面の生活空間となる面積が狭い。この事は、集落が南北方向に伸びざるを得ない事を示し、山ノ井遺跡、平野遺跡、大県遺跡、大県南遺跡、大平寺遺跡、安堂遺跡とそれぞれの遺跡間の空間が見られない程密集している。

遺跡の性格は、縄文時代から弥生時代、古墳時代、奈良時代、中世と続く大複合遺跡である。最近の調査では、縄文時代に先立つ石器も出土している。

当調査は、昭和59年11月9日、柏原市建設部下水道課から下水道管理設のための土木工事等における埋蔵文化財包蔵地の発掘通知書が提出され、柏原市教育委員会が調査依頼を受けて昭和59年12月14日試掘調査を実施した。試掘調査は、人孔部分5ヶ所に試掘トレンチを設定した。それぞれ1.2×0.7mの範囲で、地表下20～90cmまで掘削した。北側トレンチは割合浅く南側になるに従い良好な遺物包含層を確認した。この結果により全面調査を実施する事にした。

調査区は、狭い道路（幅1.5m）の中央部の下水道管を埋設予定部分に幅0.9mの細長いトレンチである。この道路は、生活道路である為、1日に掘削、調査、埋戻しが出来る範囲で実施せねばならなかった。よって、長さ2～3mのトレンチを20数ヶ所設定した。

当調査区周辺の遺跡の状況はほとんどわからずであったが、第1の目的とした縄文時代の遺物包含層を確認した事は重要な成果である。

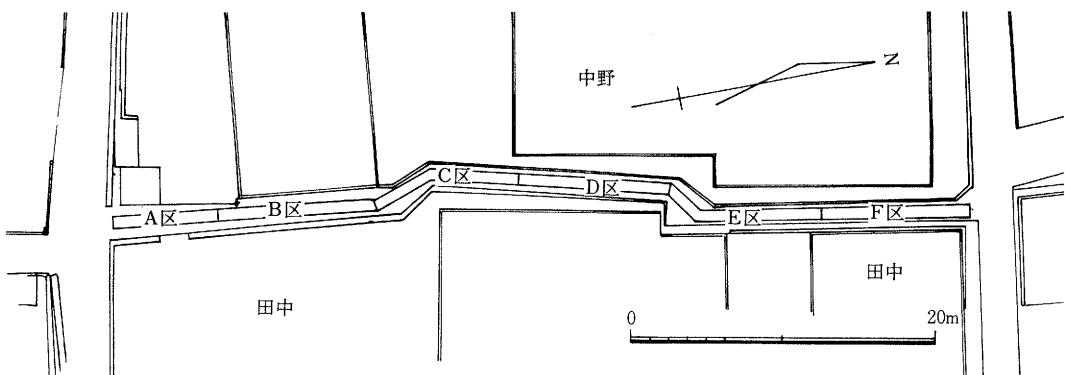


図-8 調査区位置図

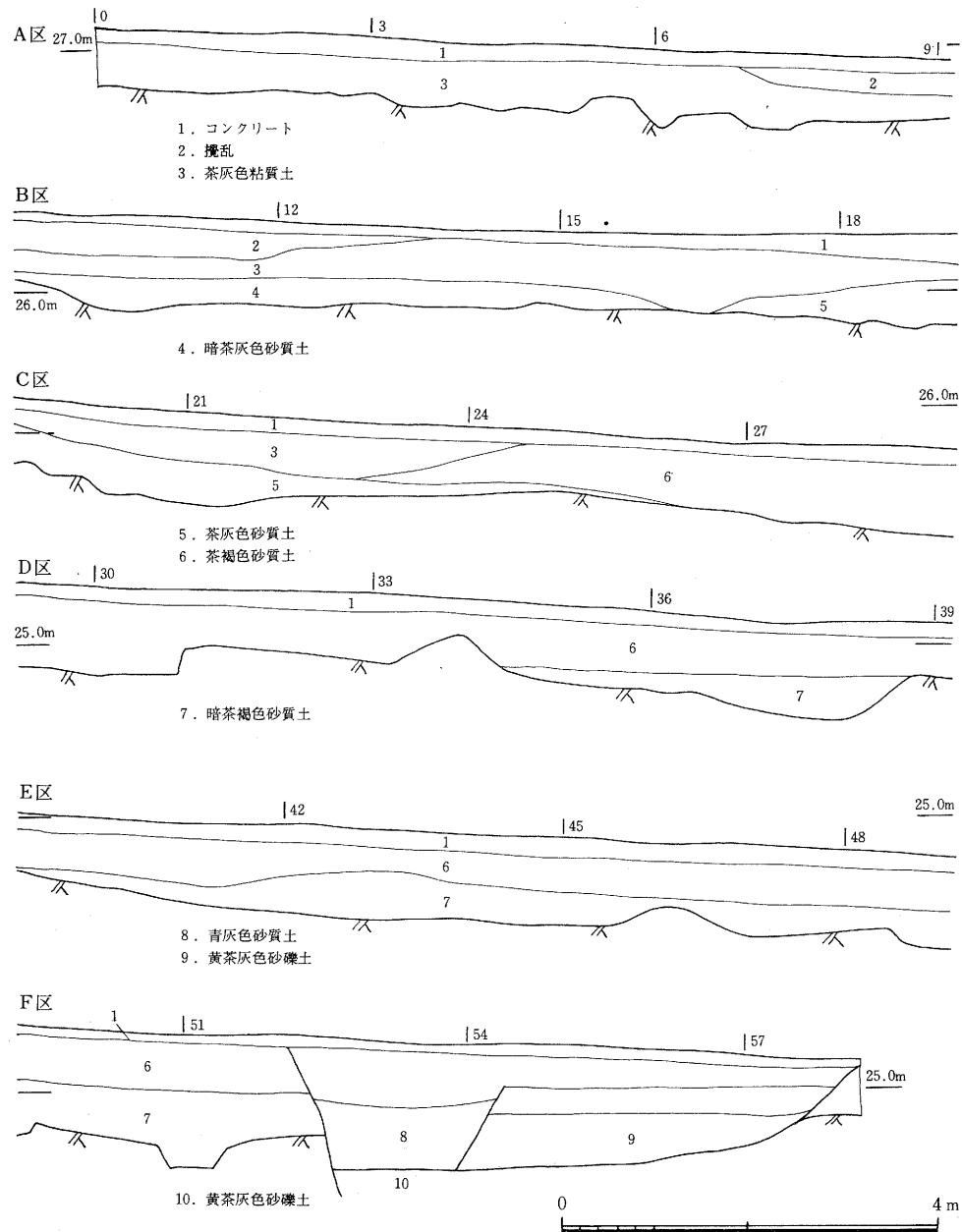


図-9 トレンチ断面図

第2節 調査

調査は、ほぼ南北方向の狭い道路中央部に、6区に分けて実施した。北側からA～F区までとし、各区約10mの長さである。道路上層は、コンクリート、アスファルト、砂利の道路敷であり、その下層の砂利や旧表土を全部含めて表土として説明を加える。

A区は、表土が約20cmあり、その下層には40～50cmの茶灰色粘質土がある。遺物はほとんど含まない。地山は、花崗岩の岩盤である。B区は、上層が20cmを測り、A区と同様に茶灰色粘質土が50cm位の厚さで続き、その下層に暗茶灰色砂質土と茶灰色砂質土がある。出土遺物は、前者からサヌカイト剝片が少量出土しただけである。

C区は、表土下に茶褐色粘質土があり、陶磁器、土師器等が少量出土した。その下層は茶灰色砂質土で、約40cmの厚さを測る。出土遺物は、サヌカイト剝片が出土した。やや風化の進んだ乳白色を呈するものと黒灰色のものがある。縄文時代と弥生時代のものであろう。D区は、

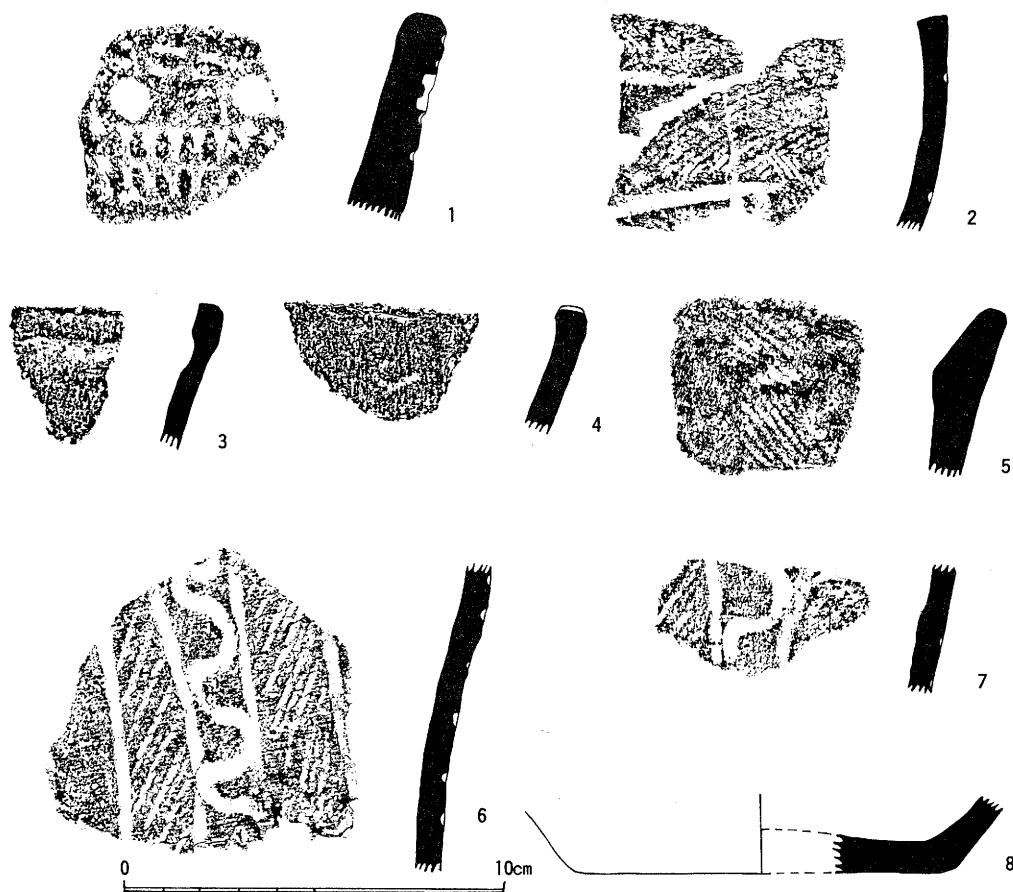


図-10 出土遺物

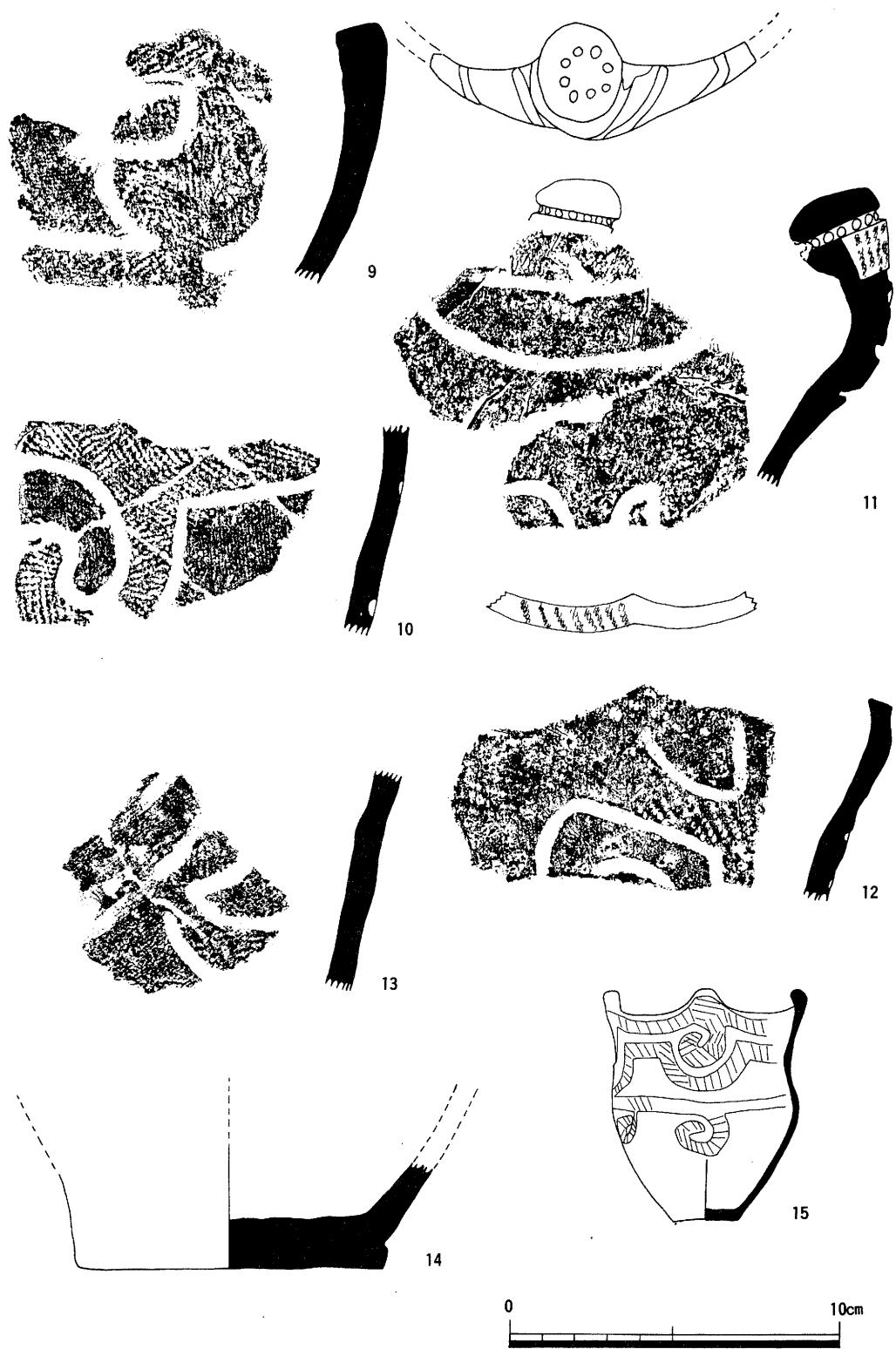


図-11 出土遺物

表土下に茶褐色粘質土が40～70cm見られる。やや南側寄りに長さ5m位の幅の落ち込みがあり、埋土は、暗茶褐色砂質土で、深さ40cmを測る。サヌカイト剝片が少量出土した。風化が進んでおり縄文時代のものであろう。

E区は、表土下に茶褐色粘質土があり、土師器、須恵器、陶磁器類が出土した。時期は、古墳時代後期のものと中世のものがある。その下層に暗茶褐色砂質土がほぼ水平方向に堆積する。この土層から縄文時代中期から後期に属する土器が出土した。F区では、E区と同様の層序を呈する。南側では、大きく土層の乱れが生じる。この乱れの時期は、調査面積が狭小な為明確に出来ないが、中世以降と考えられる。

第3節 遺 物

出土遺物は、縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器、瓦、サヌカイト石器等が出土した。縄文土器を含めそれぞれ細片であり、図化しえるものがあまり出土しなかった。今回の報告では、縄文時代の土器だけを報告したい。

1は、深鉢口縁部の破片である。わずかに外反し、口縁端部はやや丸く終わる。口縁部外面に惰円形押型文が口縁端部付近とその下方に2種類施文されている。口縁部に近い惰円形押型文の長径は口縁とほぼ平行して横位に、下方の惰円形押型文の長径は縦列に並列する。口縁端部から1cm下に径1cm前後の竹管文がみられる。口縁全体を巡るものと考えられる。内面は平滑に仕上げられている。色調は、外面は茶灰色で内面は黄灰色を呈する。胎土は、やや砂粒が多く他地域からの搬入品であろう。炭化した纖維痕がみられる。縄文時代早期押型文土器。

2は、内湾しながらほぼ直立気味に立つ深鉢の口縁部である。口縁部は水平面端部を持ち終わる。水平端面と外面に縄文が施こされている。外面は縄文を施したところと無文のところがあり、その境にやや太い沈線をめぐらす。口縁は波状口縁を呈すると思われる。色調は灰褐色を呈する。胎土は、石英、長石、角閃石を含む。河内系の土器である。

3は、粗製土器の口縁部である。口縁は外傾し内湾気味、端部は内側へ折り込み断面長方形に造る。また、その折り込み端部は強くヨコナデして粘土継目を消している。色調は、黒茶褐色。胎土は、金雲母、角閃石を含み1mm位の砂粒を多く含む。焼成は良好堅緻である。

4は、わずかに肥厚した口縁部の破片である。口縁部上面と外面には模様はみられない。色調は、灰黄色を呈するが、胎土は生駒西麓産の粘土である。

5は、口縁内側に内傾する平面を持つ口縁部の破片である。この内傾する平面と外面に斜方向の縄文が施こされている。全体に摩耗しているが、外面の縄文が部分的にすり消された部分がみられる。色調は、灰黄色、胎土は、金雲母、石英、角閃石を含む。時期は前期に属すると思われる。

6、7は、縦方向に4、2本の平行沈線を描き、その中央部の空間にS字状沈線を描き、そ

の両端の空間に縄文を施こす。さらに両端は無文帯である。色調は、黒茶褐色。胎土は、金雲母、石英、角閃石を含み砂粒が非常に多い。

9は、波状口縁の頂部にあたる。口縁部はわずかに内湾して立ち上がり、端部は肥厚する。口縁外面には直線と曲線を組んだ沈線模様が施こされ、縄文帯と無文帯を区画している。色調は、茶褐色を呈し、胎土は、金雲母、角閃石を含み砂粒がやや多い。

10は、J字文を持つ体部の破片である。無文帯は、幅の狭い（2～3mm）ヘラによる磨きを施こし、縄文を消している。9と同様の胎土である。

11は、波状口縁の頂部である。口縁部は、外反した後強く内側に折り曲げる。端頂部は乳頭形につまみ出し、沈線と縄文と連続竹管文を施こす。体部は、やや深い沈線を施こし、全体に磨消縄文痕がみられる。色調は、茶褐色を呈し、当地域産である。

12は、波状口縁の深鉢で、口縁部は、外反後わずかに内湾し、端部は肥厚しない。体部外面にやや浅く幅の狭い沈線が施こされ、口縁端部上面と沈線に区画された部分に縄文が施こされている。当地域産の胎土である。

13は、体部外面に密な沈線を施こし、無文帯と縄文帯を持つ。色調は、茶褐色で、胎土は当地域産である。

14は、深鉢底部である。底部は、使用時の傷痕が顕著にのこる。胎土は、当地域産である。

第4節 まとめ

今回の調査において、遺構が検出されなかったが、多くの貴重な遺物が出土した。縄文時代の遺物包含層は、現地表下50～60cm下層より検出した。これまでの調査例からみれば浅く、当調査区周辺は、最も安定した丘陵上である事がわかる。扇状地の中央部からやや南西部に傾いた緩斜面地である。縄文時代以降の時代を追ってあまり変化していない事がわかる。縄文土器は、早期から後期に属するもので、大変遺存状態がよく、また、風化の進んだサヌカイト剥片も各区から出土しており、ある程度の面積を有する発掘調査を実施すれば、極めて良好な遺構や遺物が検出される可能性が高い。弥生時代の土器は出土しなかったが、風化の度合いから同時期のサヌカイト剥片と思われるものが出土しており、その存在は十分観知される。古墳時代以降については、若干の須恵器や土師器が出土した。図化しえるものが少なかったが、7、8世紀代のものであろう。陶磁器や瓦は、中世頃のものである。調査区F区で確認した落ち込みは、この時期のものと考えられる。その性格については明らかにする事が出来ない。今後の調査を待ちたい。

大県南85—1次調査区

- ・調査地区所在地 柏原市大県3丁目
- ・調査期間 昭和60年2月6日～2月22日
- ・調査面積 168m²

第1節 調査概要

柏原市建設部下水道課が、岩崎谷線の水路改修工事を計画し、恩智川から旧国道170号線東側の貯水池までの約160mを3ヶ年計画によって実施する事になった。当地は、大県南遺跡の東端に含まれる事から、同課より土木工事等における埋蔵文化財包蔵地の発掘通知書が提出され、柏原市教育委員会が調査依頼を受けて実施したものである。今年度の調査は、その最終年度にあたる。

発掘調査は、旧国道170号線の道路内の調査である事から幾多の制約のもとに実施した。道路内の予定地に鋼矢板を打ち込み、復興板を被せての調査である。岩崎谷の谷筋部にあたり、當時流れる水の処置について、貯水池から直接ポンプアップして排水する事にしたが、元来多湿性の土壤であるから流れ込み以外の排水の問題が大きかった。道路内での作業である為交通の往来の安全対策や朝夕のラッシュにおける時間制約による問題、大小を問わず塵、排気ガス等の落下物の問題、調査によって生じた排土の問題、照明の問題、調査深度、調査期間等々である。これらは関係各位の努力によって解決した。

第2節 調査

調査は、北側からA、B、Cの3区分し、以下に報告する遺構と遺物を検出した。A区は、貯水池から旧国道170号線までの約13m、B区は、旧国道内約30m、C区は、旧国道から西へ約13mの区間である。

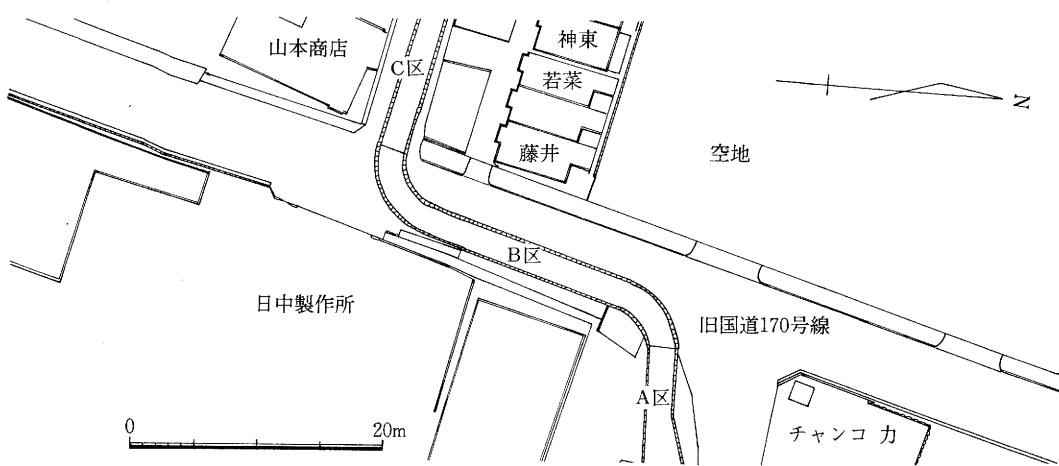


図-12 調査区周辺図

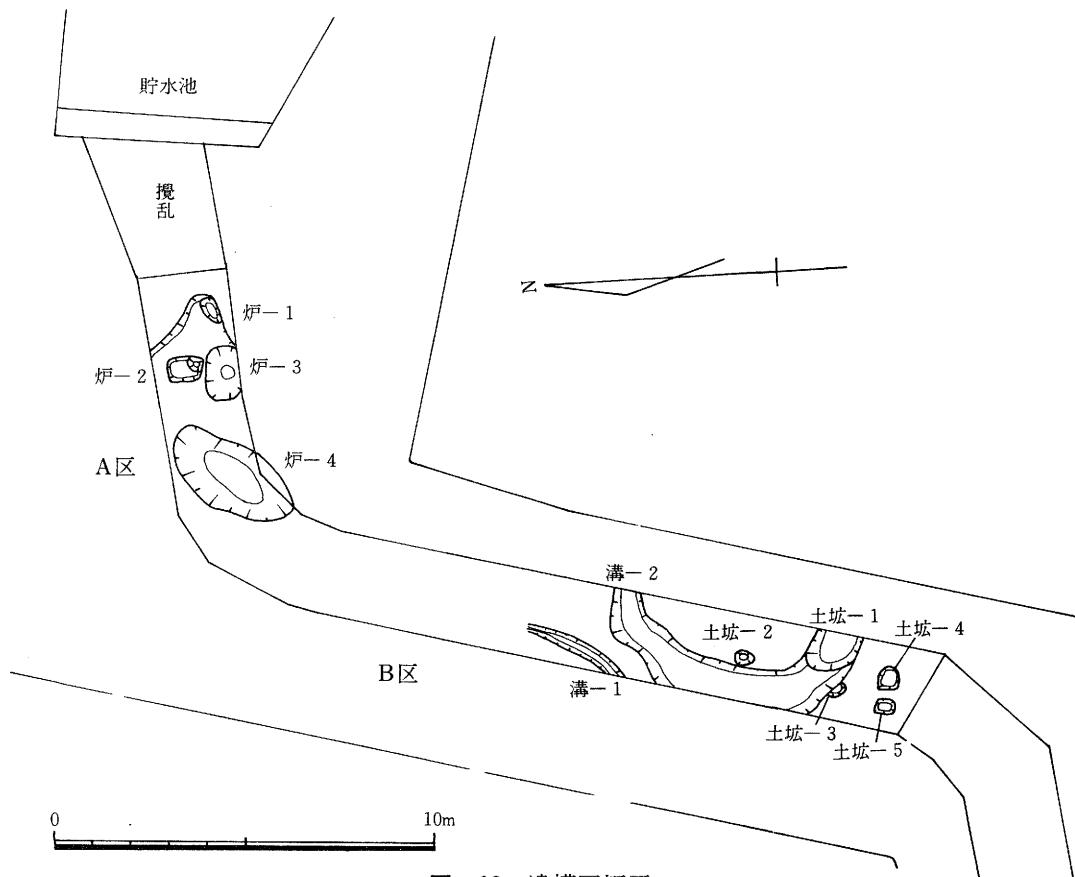


図-13 遺構図概要

A区

A区は、貯水池から旧国道170線までの約13mの区間である。しかし、東側から6mまでは貯水池建設の折の攪乱によってほとんど削平されていた。

西半部分において4ヶの炉が検出された。それぞれ形態や規模が相違する。各遺構ごとに説明を加えたい。

炉-1 A区中央部で検出した規模が明確でない炉である。南北×東西各1m位の円形状の底部だけが遺存していた。上層部分は不明である。底部は、ほぼ平坦であるが、小さな凹凸が激しい。高温によって硬化した焼土壁と多量の炭が堆積して黒茶褐色を呈する。底部は壁土を貼り付けたものではなく、緑灰色粘土上に

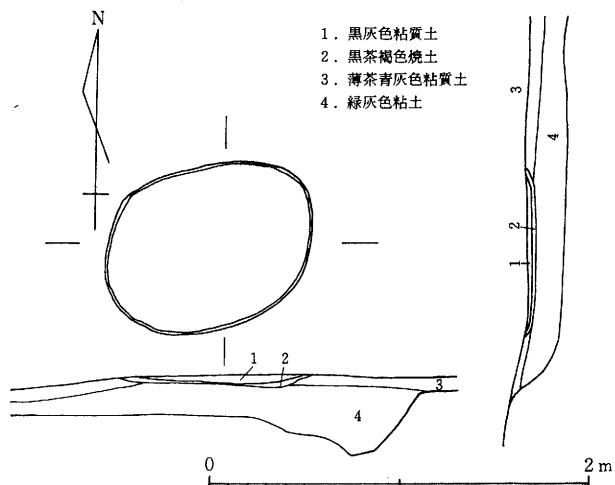


図-14 炉-1

ある薄茶青灰色粘質土が熱影響を受けたと考えられる。この周辺にも炭が散布しており、薄茶青灰色粘質土にも炭の混入がみられた。焼土及び炭層中には多くの遺物が混入していた。遺物は、土師器、須恵器、製塩土器、鉄滓等が出土した。この他にも焼成を受けた偏平な板石がある。炉-4にも同様の板石が多く出土している。安山岩か玄武岩であろう。詳細は専門家の鑑定を待ちたい。

炉-2 炉-1の北西部約2mを隔てて位置する半地下式の焼土塙である。規模は、東西幅0.94m、南北幅1.5m、深さ0.15mを呈し、形状は、北半部が隅丸方形、南半部は円形である。北半部は焼成を受け、南半部は焼成を受けず単なる落ち込みである。この落ち込みは、64×60cmの大きさで、深さ25cmの平底状である。丁度人間1人が入り込む広さである。埋土は、淡褐色砂土で、底部及び北側斜面部に2~5cm厚さの炭層がみられた。焚口部である。

炉内は、東西と北側の壁が垂直に近い角度で立ち上がり、厚さ3cm位のスサ入り粘土を張り付けて壁としている。埋土は、灰褐色粘土（少し炭を含む）と炭層がある。灰褐色粘土は、上層で約8cm以上である。下層は、2~3cmの炭層である。炭は、よく炭化し細粒になっており、良好に焼成され炭塊はほとんど含まない状態である。しかし、灰にまでは至っていない。炉の底部も焼成を受け茶褐色土に堅く変色している。

出土遺物は、炭層の上面に須恵器の甕が押し壊された状態で出土した。主に上半部が遺存し、下半部はなかった。炉の廃棄時に何らかの意味を持って入れられたものと考えられる。他の遺物は1点もない。この形式の炉は、大県84-1次調査区の鍛冶炉-1と形態、規模共によく似ており、周辺から鍛冶に関わる鉄滓が出土している事から、鍛冶炉の可能性が強い。大澤正己氏にこのような形態の炉が、中世の時期の西日本に分布している事をお聞きした。この炉との関連については、時期が隔たりがあり過ぎ不明である。

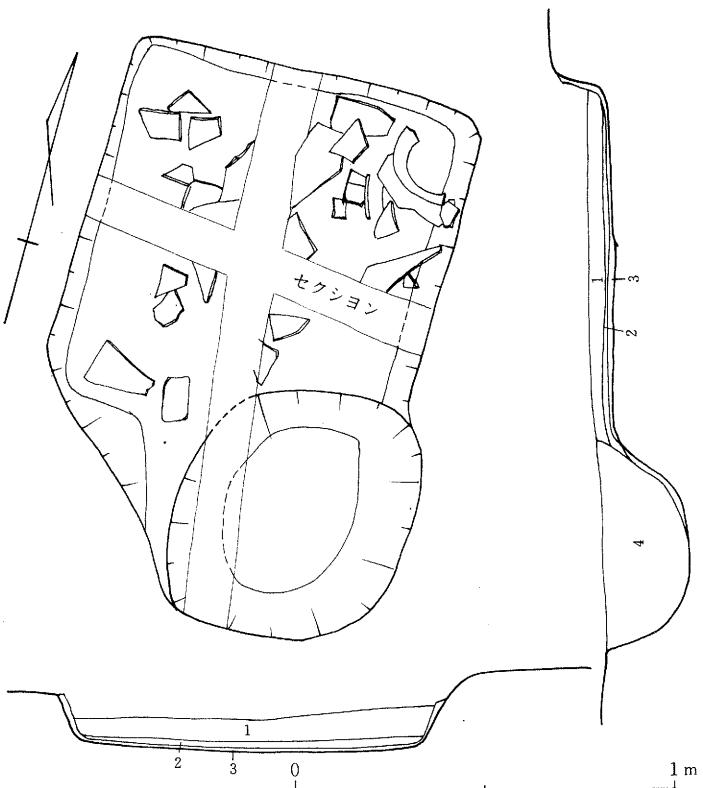


図-15 炉-2

炉-3 炉-1の西側で

炉-2の南側に隣接した炉である。平面形態は、橢円形を呈し、断面は、上半部が八の字状に拡がり、下半部は垂直に近く落ち込んでいる。規模は、東西約3.0m、南北1.7m、深さ1.1mを測る。埋土は、上層から次の通りである。1層は、青灰褐色粘質土、2層は、青灰色粘質土でわずかに炭を含む。3層は、青灰褐色粘質土で炭や灰を非常に多く含んでいる。4層は、黒色炭層である。5層は3層と同じである。底部は、平底に近くわずかに中央部が凹んでいる。底部や側壁は全部黒茶褐色焼土で強く焼成を受けている。この焼壁にはスサの混入がなく、地山を掘削後そのまま炉として使用したものであろう。

出土遺物は、各層とも多くの遺物を含んでいた。須恵器、土師器、製塩器、炭、焼土等である。遺物は細片が多い。

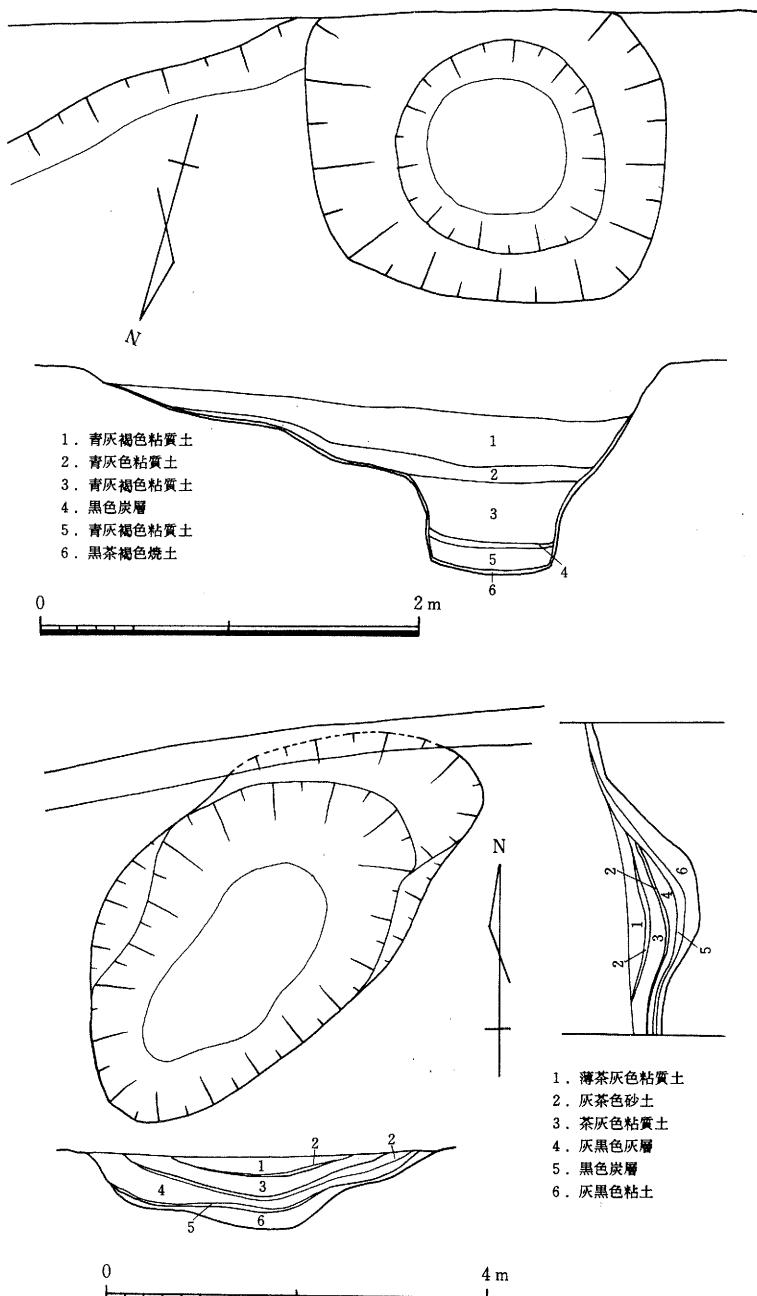


図-16 炉-3、4

炉-4 炉-3の西側に在り、N-45°-Eに長橢円の主軸を持つ地下式の大型焼土塙である。長径5.0m、短径2.8m、深さ0.8mを測る。埋土は、上層より、1層薄茶灰色粘質土、2層は、灰茶色砂土。3層は、茶灰色粘質土、4層は、灰黑色灰層、5層は、黑色炭層、6層は、灰黑色粘土である。底部から肩部にかけては、黒茶褐色焼土で、炉-3と同様の焼壁である。

埋土中、須恵器、土師器、製塙土器、炭、焼土等が出土した。また、炉一1で出土したような偏平な焼けた石魂も出土した。

B区

A区の西側の旧国道170号線の道路内にあたる。ほぼ南北方向に約25mを測り、5mごとに1～5区に分けた。上層は、道路内埋管等によって攪乱されており、遺物包含層が厚く堆積している部分も存在したが、遺物採集程度にとどめた。下層については、人力掘削により調査を実施した。

B-1区は、炉一4の西側から平坦な面となり、遺構は検出されなかつたが、割合薄い土層が何層にも水平堆積して版築状を成す遺物包含層を検出した。これまでの調査例から、旧国道170号は、東高野街道と重なっており、道路下層に古代の道路敷と思われる土層を検出している。これらと同様に道路敷の可能性が強い。地山直上の土層は、自然堆積の遺物包含層であるが、その上層は2～5cm厚さの人工的な堆積状況を呈し、堅固である。B-2区の手前でほぼ消滅している。調査区がやや西寄りであるので道路敷がほぼ南北に伸びB-2区で検出されなかつたかもしれない。道路敷の土層から須恵器と土師器が出土した。それぞれ3～5cmに満たない小破片である。時期は明確に出来ないが、この下層から布留式土器が出土している。

B-2区は、約20cmの黒灰色粘土が堆積していた。遺構と遺物は検出されなかつた。

B-3～5区は、まとめて記述したい。

溝-1 3区西端からN-30°-Eの傾きにほぼ真直ぐ伸びた小溝である。北側で自然消滅している。南北3.5m以上、幅40cm、深さ10cmである。埋土は、薄茶青灰色シルト層である。遺物は、出土しなかつた。

溝-2 3～4区にかけて、半円形を呈する大溝である。溝幅は、1～1.5mを測り、溝の外側までの径は、約9mである。断面は、円弧状を呈し、中央部が一番深い。埋土は、薄茶灰色シルトと青灰色粘質土がある。深さは、20cm未満である。遺物は、植物遺体以外何も出土しなかつた。

土塙-1 溝-2の南東端に検出した土塙で、南北1.8m、東西1.0m以上、深さ60cmを測る。断面逆台形である。埋土は、青灰色粘土に黒灰色粘土の塊が班点状に混入している。

土塙-2 溝-2の東側肩部付近に検出した円形土塙である。径40～50cm、深さ27cmを測る。埋土は、暗青灰色砂礫土で、出土遺物は、須恵器、土師器がある。

土塙-3 溝-2南側肩部に接して検出した円形土塙である。南北25cm、東西40cm、深さ10cmを測る。埋土は、暗青灰色粘土で、炭と焼土をわずかに含む。

土塙-4 4区南側から検出した焼土塙である。南北40cm、東西45cm、深さ7cmを測る。西南端に多量の焼土が押しつぶされた状態で出土した。焼土は、黒茶褐色粘土である。他の埋土は、暗青灰色粘土で炭をわずかに含んでいる。

土塙-5 土塙-4の西側に検出した隅丸方形の焼土塙である。南北及び東西長が約30cm、深さ10cm弱を測る。埋土は、暗青灰色粘土で多くの炭を含んでいる。遺物は、須恵器、土師器、獸骨等が少量出土した。土塙-4、5ともに底部と側壁は焼成を受けた状態はみられない。

C区

C区は、旧国道170号線より西側部分で、既設の下水道管の為にほとんど削平されていた。一部検証したが、全部地山で何ら遺構は検出されなかった。

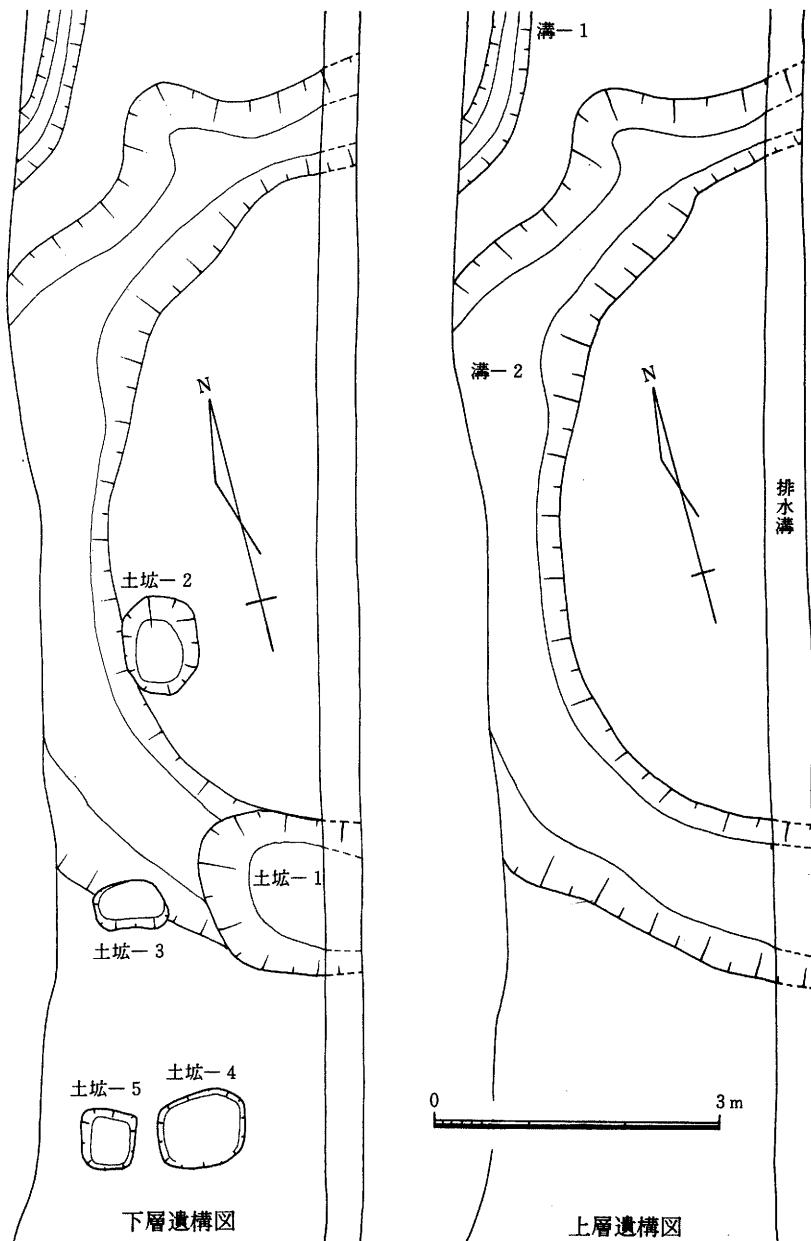


図-17 B区遺構図

第3節 遺物

A～C区において、遺構及び遺物包含層から多量の遺物が出土した。コンテナ箱10箱出土した。須恵器、土師器が大部分であるが、製塙土器、鉄滓、輔羽口、瓦、獸骨等も少量ながら出土した。前者は、遺構と遺物包含層に分け、後者は、各項目別に記述していきたい。

炉-1 出土遺物（図-26、1～10）

須恵器は、杯蓋身、壺、甕がある。1～3は、杯蓋である。天井部と口縁部の間の稜は全く見られず、口縁端部は丸く仕上げられている。杯身は、たちあがりが短く内傾するものと口縁端部がわずかに段を有するものがある。後者の形態は1点だけで、前者が大半を占める。7は、提瓶の肩部である。肩部の把手は、退化が進みわずかにカギ形の突起になっている。体部にはカキ目調整が施こしてある。甕は、口縁端部が外反し、外側に1条の凸線が巡るものと外反後わずかな段を持ち垂直にたちあがるものがある。土師器は、口縁部がゆるくくの字形に短く折れ曲がる形態のもので、体部外面と口縁部内面にハケ目調整を施こした壺がある。須恵器の杯は、6世紀後半頃のものであるが、甕はそれよりやや古相である。

炉-2 出土遺物（図-27、11）

炉底全体に同一甕の上半部分が割って拡げた状態で出土した。甕は、口径42.6cmを測る大型

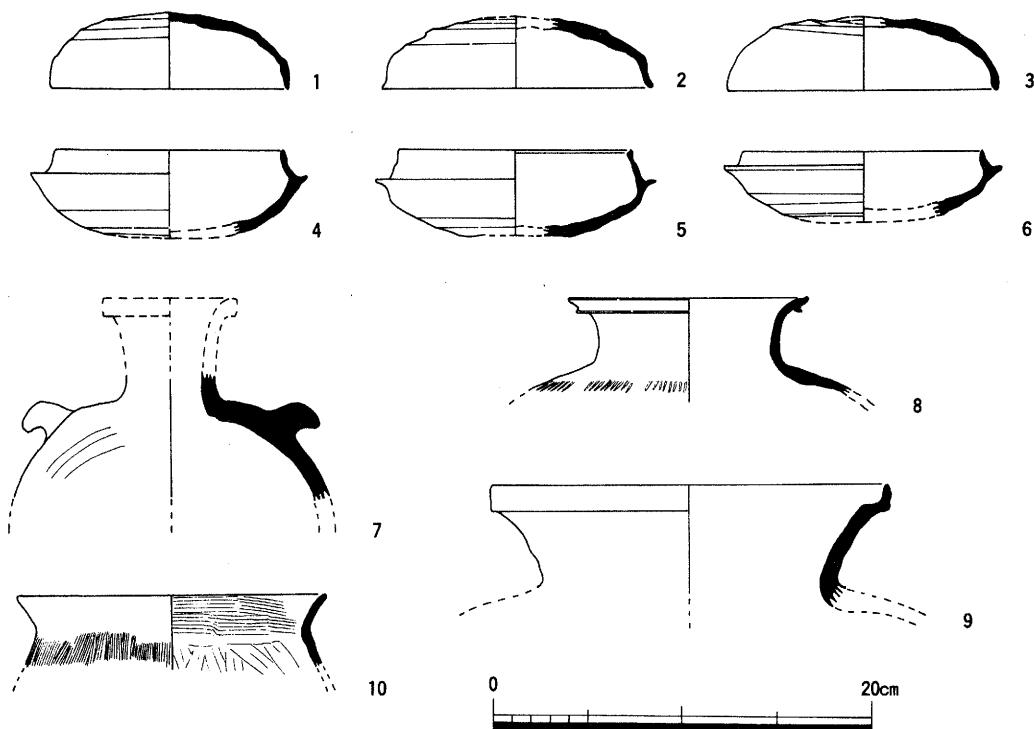


図-18 炉-1 出土遺物

の甕である。口頸部からゆるやかに外反した後、上端近くでさらに強く外側に屈曲する。口縁端部は逆コの字状を呈し、一条の凸線が巡る。

頸部と体部の外面は、平行タタキ後回転ナデを施こす。頸部と体部の接合部分は、内外面共にヘラ削りを横又は斜方向に行なっている。内面

は、きれいにナデ調整している。この甕は、最古式に当る須恵器である。炉一2の廃絶時期を示すものでないが、ある程度の使用期間を考えれば充当するだろう。

炉一3出土遺物（図-28、12~16）

須恵器は、杯と甕がある。杯蓋は、天井部はやや平坦面を持ち、口縁部との境に明瞭な稜を持つ。口縁端部は、内傾するわずかな段を持つ。同形態の杯身も小破片ながら出土している。甕は、口頸部がゆるやかに外反し、口縁端部が垂直に立ちあがる。口縁外面に割合大きな凸線が巡る。体部外面に平行タタキを施こし、内面に同心円文タタキを施こした後にナデ消しによって平滑に仕上げている。

土師器は、杯と甕がある。杯は、体部が偏平な半円に近く口縁端部が短く外反する形態のものである。口縁端部断面は、逆コの字状を呈する。底部外面にヘラ削りを施こしたもの（14）と施こさないもの（15）がある。甕は、口径は不明な小破片である。口縁端部は、面どりをしている。内外面の調整は、ハケ目調整を密に施こす。色調は、茶灰色を呈し、胎土は、金雲母、石英、長石の微砂粒が少量含まれる。この他にも、壺や高杯等がある。口縁部が欠損しているが、厚い体部を持ち、内面に粘土継目が明瞭に遺存する小形壺の破片もある。

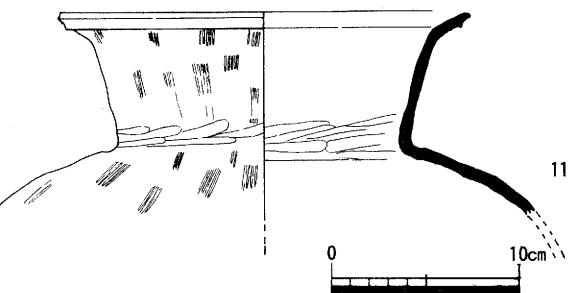


図-19 炉一2出土遺物

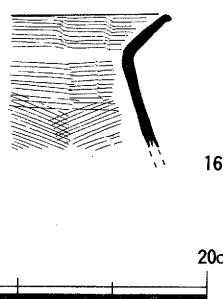
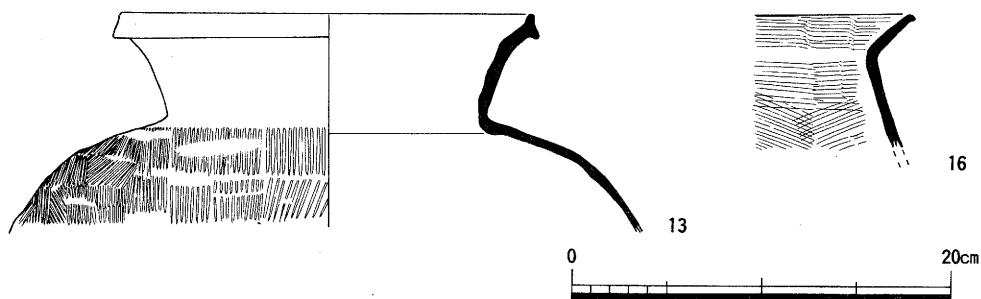
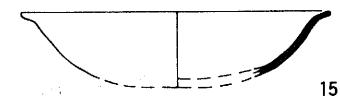


図-20 炉一3出土遺物

炉—4 出土遺物（図—29、30、17～50）

須恵器は、杯、高杯、器台等があり、杯がその内一番多い。杯蓋は、17と18のようにやや口径が小さいものと、19～21の大きいものがある。全体に天井部が半円形に丸いものが多い。稜は、明瞭に付くがわずかながら短く鋭さも失われつつある。口縁端部は、内傾する平面のあるもの、段又は凹線を施すものがある。前者は少なく、後者が大半を占める。杯身は、受部が大きいものからやや小さくなつたものがある。後者のものは口径が小さく、口縁端部が凹線又は内傾する段を持つものが多い。色調は、灰色及び青色を帯びたものが多い。胎土は、精良なものが多いが口径が小さく雑な仕上げのもの（21、26）はやや砂粒が多い。

32と33は、底部にヘラ記号を持つ例である。32は、底部中央部に一?と受部近くに平行な四本線を入れている。33は、底部中央にV字状のヘラ記号がみられる。どちらも焼成前の施文である。

34は、器台の脚部である。脚部はハの字形に外反した後端部付近で内方へ屈曲させている。スカシ窓は、三角形である。全面に波状文帯を付し、脚端部外面にもみられる。

35は、高杯脚部である。短脚でハの字形に外反し、端部は丸く仕上げている。36は、壺の口縁部である。外反する口縁が2段になり、その外面に波状文を施す。

土師器は、杯、高杯、壺、鉢、甕等がある。杯は、ほぼ同形態のものである。半円形の底部に口縁部付近でくの字形に短く外反する。口径12.1～13.2cm、器高4.4～5.6cmと均一性の高いものである。この他にも細片であるが多数出土している。色調は、明茶褐色と灰褐色のものがある。いずれも金雲母とくさり礫を含み砂粒が少なく精良な粘土を使用している。調整は、底部外面をヘラ削りするのが主流であるが、ナデ調整だけのものがある。これは、ヘラ削り後にきれいなナデを施したものかもしれない。高杯は、杯と同様に半円形の杯部を持ち、口縁端部で外反し、さらに内側に肥厚している。色調は、灰茶色を呈し、胎土に金雲母を含まない。外面は、ハケ目調整で内面は板ナデ調整である。

壺は、球形に近い体部とやや外反する短い口縁部を持つもので、二次焼成を受け、赤褐色又は黄灰色に変色している。その為か表面剝離を呈する。内面はヘラ削りを施し、外面はハケ目調整である。体部の最大腹径付近で内外面の調整方向が転換している。

44、45、49、50は、鉢である。平底状の底部に偏平な体部を持つ。口縁部は、内湾した体部からくの字形に大きく外反する。口縁端部は、44のように丸く終るものと端部外面を平坦に成すもの、一条の沈線を巡すものがある。内外面ハケ目調整である。色調は、茶灰色を呈する。胎土は、杯や壺と同じである。

46～48は、甕である。肩の張らない体部に鉢と同様の口縁部を持つ。口縁端部も同様に平坦な面と一条の沈線が巡る。色調と胎土は、鉢と同じである。内外面ともハケ目調整である。内面上半のハケ目方向は、横方向であり、部分的なナデ消しがみられる。

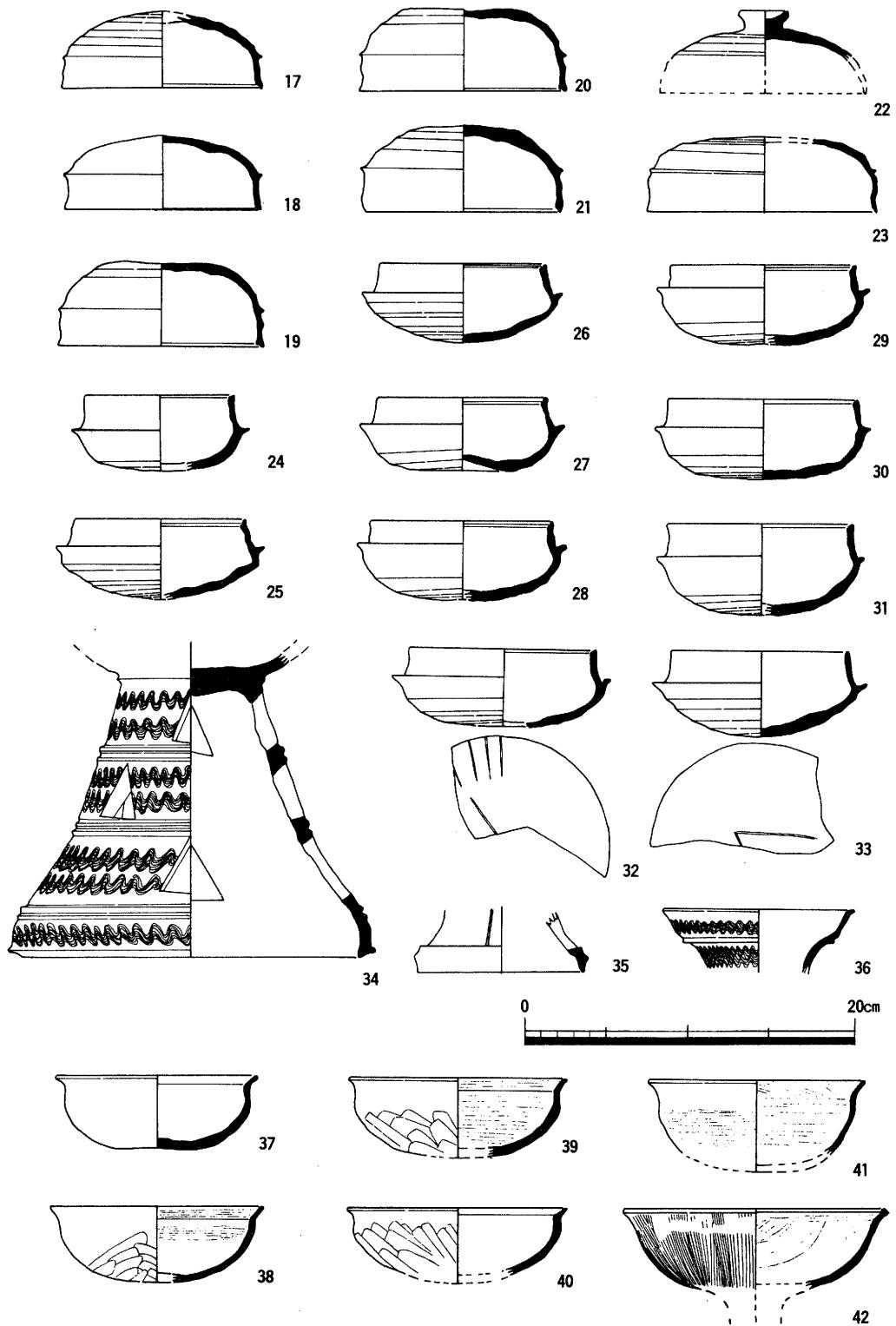


図-21 炉-4 出土遺物

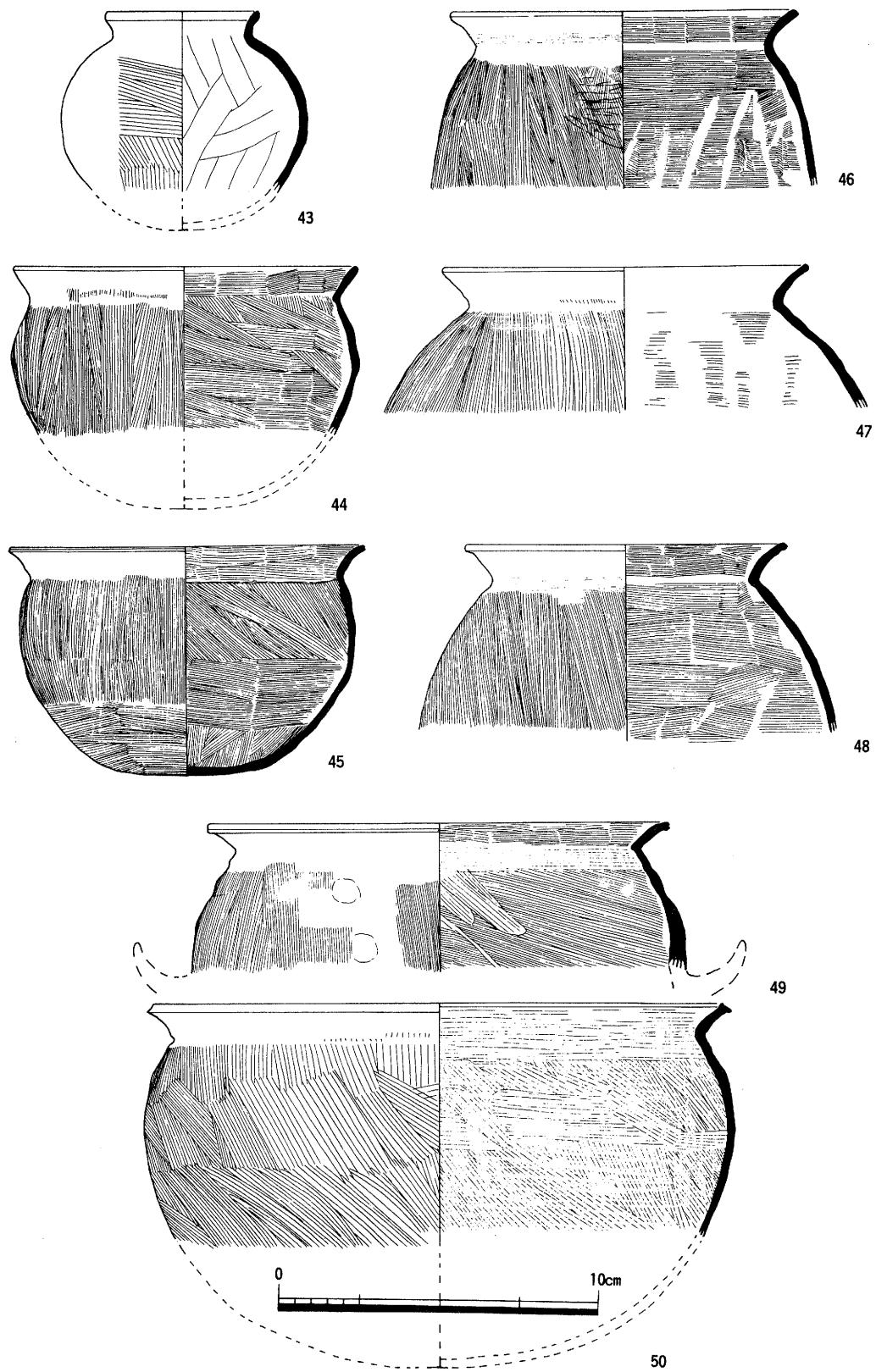


図-22 炉-4 出土遺物

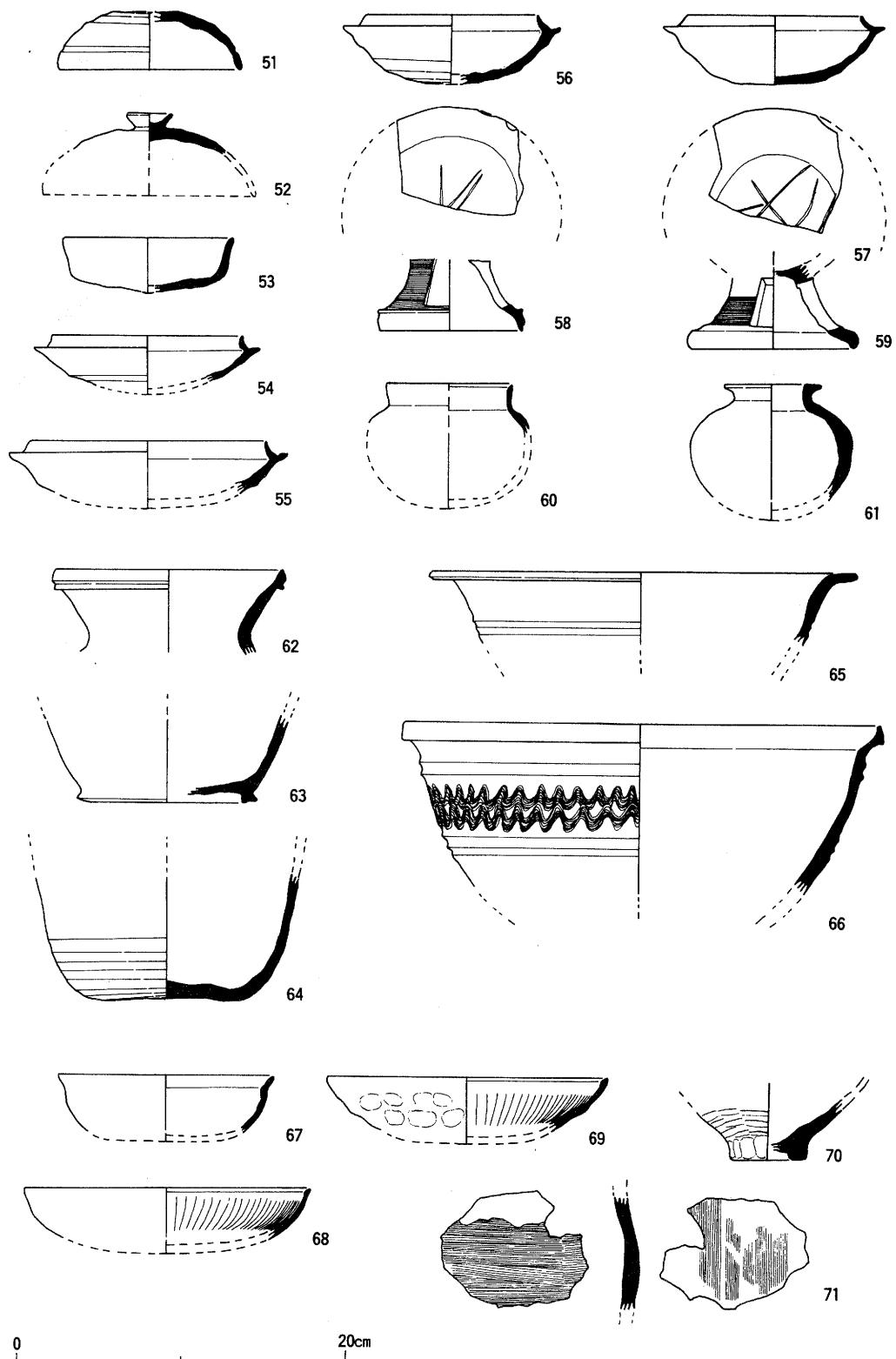


図-23 包含層出土遺物

遺物包含層出土遺物（図-32、51～71）

須恵器は、杯、高杯、壺、甕、器台等がある。杯蓋は、天井部と口縁部の境の稜はみられず口縁端部も丸く終るものが主流を占める。擬宝珠つまみが付く形態のものは1点も出土しなかった。古相を示すものは、炉-3、4出土と同類である。52は、高杯の蓋である。杯身は、蓋と同様の時期のものが主流を占める。たちあがりが短く偏平なものが多い。口径は、10～14cmまで測る。53は、たちあがりが消滅し、蓋と同形態であるが、底部が雑な仕上げでありよく摩耗している事から杯身となると考えられる。56と57は、底部外面にヘラ記号を持つものである。高杯は、短脚のもの2点を図示したが、長脚2段となる形態のものも多く見られる。

小型の壺が2点ある。円形に近い体部に直立する口縁部を持ち、その口縁端部が内傾する平面を持つものとやや器壁が厚く水平方向に広く平面を持つものがある。

甕は、口径が小さく口縁端部に2本の凸線が付くものである。出土遺物の中では器形が大きい為か破片量は一番多い。中型壺の底部で、小さな高台が付くものと平底となるものがある。器台は、口縁端部が水平方向に伸びるものと外反した後上方へ屈曲し外面に一条の凸帯が付く。66の外面は、明瞭な段を持ち、段と段の間に波状文帯が付く。65の体部には、明瞭な段はみられず退化して沈線状を呈する。65の方が後出的である。

土師器は、杯、高杯等がある。杯は、炉-3、4出土の杯と同類のものと器高が低く内面に暗文が施されているものがある。69の高杯は、内面に放射状暗文を持ち、杯部底にやや形骸化した段を有するものである。その他の器種として、各遺構出土遺物の壺や甕、鉢の他に、甌や土釜や移動式かまど等がある。71は、壺の体部の破片である。内外面はハケ目調整が施されたもので、内面に青灰色を呈する溶着金属の付着がみられる。他の部分も熱影響を受け変色している。70は、弥生第5様式の壺の底部である。色調は、赤茶褐色を呈し、胎土に金雲母と角閃石を含んでいる。

製塙土器（図-33、34、72～108）

製塙土器は、炉1、3、4の遺構内から多数出土した。700点以上を数える。この他にも少量ながら遺物包含層から出土した。胎土は、下記の如く大別して4分類出来る。各遺構別に略述していきたい。

a類……非常に良好な粘土を使用し、砂粒をほとんど含まず精良である。色調は、薄ピンク色や灰白色である。器壁は、1.5～2.0mmを測る。

b類……胎土中に金雲母や角閃石を含み生駒西麓産と思われる。色調は、茶褐色系統のものである。器壁は、2.0～3.0mmを測る。

c類……わずかに細砂粒を含み、くさり礫を含むものもある。色調は、薄茶灰色や黒灰色のものがある。器壁は、2.0～3.0mmを測る。

d類……径1mm位の砂粒を多く含み、器壁が3～5mmを測るもの。色調は、茶灰色を呈する。

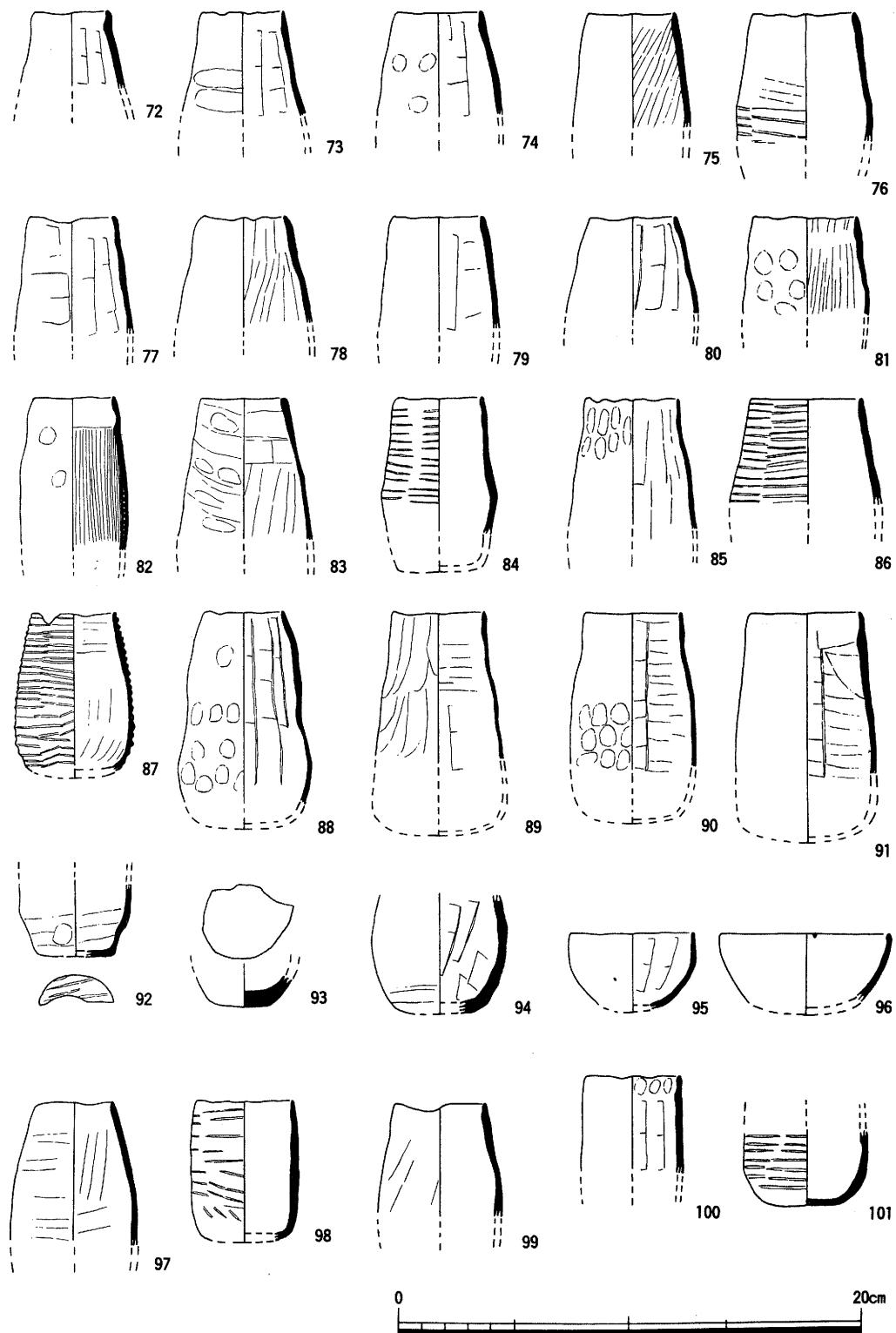


図-24 製塩土器

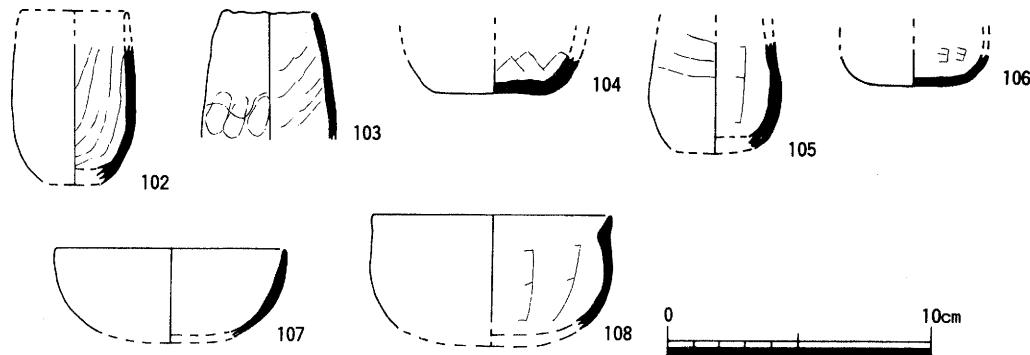


図-25 製塩土器

炉-1 出土製塩土器は、総数110点を数える。形態は、小型平底のコップ型のものがほとんどを占め杯型をしたものは見当らない。口径は、5~6cm、器高が、9~10cm位の小型の土器である。器壁の厚いものが少なく、2.0~3.0mmのものが多い。外面に平行叩きを施こすものは、表面が摩耗が激しいという事もあるが、凹凸の少ないものが多い。外面が無文のものは、指ナデ又はナデである。内面の調整は、板ナデが主である。横方向の板ナデを施こすものは、内面全体を丁寧に調整するのに対し、縦方向の板ナデを施こすものは、c類に分類されるものの中に多く全般に雑な感じがする。外面と同じくナデ調整のものもある。時期は、6世紀後半に属する。

炉-3 出土製塩土器は、出土点数が最も多く総数537点を数える。形態は、小型平底のコップ型がほとんどを占める。口径は、4.2~6.4cmまでのものがあり、器高は、10.0~13.8cmを測る。外面の叩きは、全部口縁部と同一方向の平行叩きである。摩耗の激しいものが総点数の約2割程度を占め、叩きを施こすものの比率も少し増加するかもしれない。外面調整は、a類ではほとんどのものが指ナデであり、指紋痕が顕著にみられる。b類ではナデ調整である。c類ではナデ調整が大半を占め、その中で指紋痕のみられるものはわずかである。

胎 土	叩き模様	無 文	小 計(%)
a	2	24	26(23.6)
b	0	3	3(2.7)
c	8	72	80(72.8)
d	0	1	1(0.9)
小 計	10 (9.0)	100(91.0)	110(100.0)

表-1 炉-1 出土製塩土器

胎 土	叩き模様	無 文	小 計(%)
a	4	108	112(20.9)
b	1	9	10(1.8)
c	22	386	408(76.0)
d	1	6	7(1.3)
小 計	28 (5.2)	509(94.8)	537(100.0)

表-2 炉-3 出土製塩土器

胎 土	叩き模様	無 文	小 計(%)
a	0	2	2 (5.4)
b	1	1	2 (5.4)
c	5	21	26 (70.3)
d	2	5	7 (18.9)
小 計	8 (21.6)	29 (78.4)	37 (100.0)

表-3 炉-4 出土製塩土器

内面調整は、a類では横方向の板ナデ、b類では縦又は横方向の板ナデ、c類では縦横の板ナデとナデ調整、d類はb類と同様である。時期は、5世紀後半である。

炉-4出土製塙土器は、総数37点を数える。形態は、小型平底のカップ型と口径が器高より高い杯型の2種類がある。前者は、口径4.6~5.8cm、器高8.6cm以上を測る。後者は、口径7.4~10.0cm、器高4.7~4.9cmである。外面調整は、平行叩きを施こすものや指ナデのものが多い。平行叩きは、小型平底の外面のみみられる。内面調整は、横又は縦方向の板ナデが主流を占める。時期は、5世紀後半から6世紀初頭までである。

遺物包含層出土製塙土器は、総数29点を数える。小型平底のものと杯型のものがある。これらは、炉-1、3、4の上層掘削時に出土しており、各遺構に限定されないが、その関わりが強いものである。

韓式系土器（図-34、109~113）

今回出土した韓式系土器は、陶質土器が5点出土した。出土層位は、5~6世紀の遺物が多数出土した遺物包含層からである。叩目文は、縄蓆文、縦平行文、格子文がある。

109、110は、壺か甕の体部の破片である。色調は、暗青灰色（断面は、赤褐色）で、焼成は堅緻である。胎土は、精良であるが白色砂粒が混入している。表面の縄蓆文は、交差するような部分が見える。内面は、指又はヘラ状の工具で滑めらかに整えられている。器壁の厚さが109の方が110の約2倍の厚さを測る事から別個体ではないかと考えられる。111は、横平行叩きを持つ壺か甕の破片である。色調は、青灰色で焼成は堅緻である。胎土は、細砂粒を含むが精良である。叩き目の間隔は、6本/2cmである。縦方向に一条のすり消し線がある。内面は、同心円文叩きをなで消した痕跡がみられる。112、113は、壺か甕の破片である。色調は、灰褐色、灰黒色で焼成はやや軟質である。胎土は、石英粒を少し含むが精良である。外面の格子叩きは明瞭に痕るが部分的にナデ消している。内面は、幅の広い同心円文叩きがみられる。

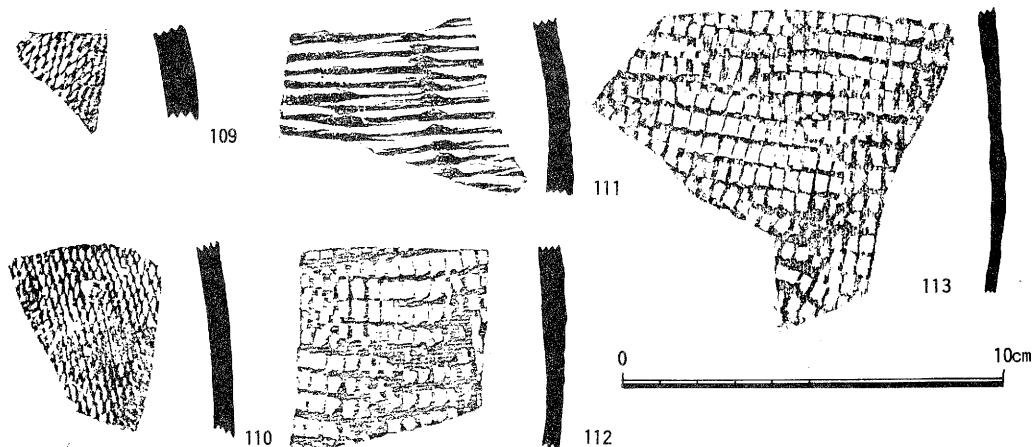


図-26 韓式系土器

鉄滓、轆羽口（図-35、114～116）

鉄滓は、炉-1、4から各1点ずつ出土している。大きさは、 $3.1 \times 4.5 \times 0.7\text{cm}$ 、22g、 $3.2 \times 5.2 \times 1.8\text{cm}$ 、29gの小形の鉄滓である。表面は、多くの気泡や木炭がみられる。前者は、6世紀後半、後者は、5世紀後半の時期の小鍛冶によって生じた椀形滓である。轆羽口は、炉-1～4の上層遺物包含層から出土した。小鍛冶に使用された送風装置である。八の字状に広がる円筒状の形態のもので、色調は灰白色、胎土は角閃石を含み砂粒がやや少ない。先端部には溶融金属の付着がみられ、他端は欠損している。体部の一端に切り込みがみられるがどのような用途があるのか明確でない。内径が1.3～2.0cmと小さい。時期は、5世紀から6世紀前半までの時期のものであろう。

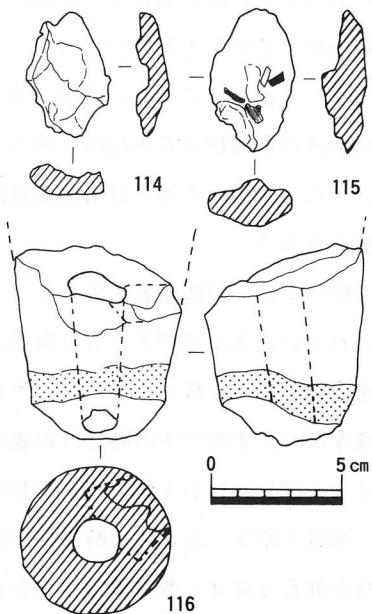


図-27 鉄滓・轆羽口

瓦（図-36、117～121）

遺物包含層から平瓦

が少量ながら出土した。
瓦は、飛鳥時代末から
奈良時代までのものと
思われ、付近に想定さ
れている山下寺あるいは
大県郡衙からの流出
瓦かも知れない。

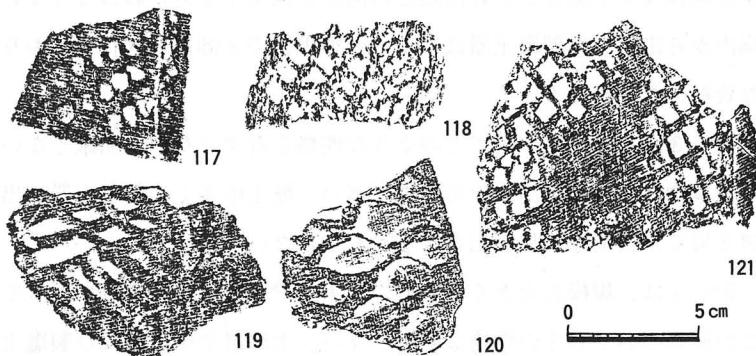


図-28 平瓦拓影

第4節 まとめ

今回の大県南遺跡内岩崎谷下水道埋管工事に伴なう発掘調査が本年をもって終了した。昭和58年度から60年度までの3ヶ年である。ここにその経過を述べる紙面はないが、事業終了における調査成果の概要を整理し、大県南遺跡の性格を若干整理しておきたい。

弥生時代の遺構は検出されなかった。古墳時代の遺物包含層中から細片の弥生土器が出土した位である。最も古い遺構は、本年度調査したA区における炉跡群である。これらの炉の埋土中から多数の遺物が出土した。炉の性格については、炉-2が鍛冶炉ではないかと考えられる以外明確ではない。炉-2は、大県84-1次調査区で検出した鍛冶炉と非常に近く似した規模や構造をしており、炉内から鉄滓や轆羽口等の鍛冶関係遺物が出土していないという問題が

のこるもののが遺物包含層や周辺の遺構から鉄滓や鞴羽口が出土している状況から判断すれば、鍛冶炉と考えて大過ないだろう。この炉の廃絶は炉底部から出土した須恵器の甕（陶邑編年Ⅰ－1）が出土しており、遺構の切り合い関係から炉-4よりも古い5世紀中頃以降である。大県遺跡の鍛冶炉は6世紀前半期のもので同形式の炉型がさらに1世紀近く遡りうる事が明確となった。今後、大県及び大県南遺跡に定住する鉄器生産関係集団の性格を考える上で重要な資料となろう。

炉-1は、炉底が若干波打ち小さな凹凸を持つがほぼ平面的である。炉上部がほとんど削平されている事から炉の全容は復元困難である。しかし、出土遺物に製塩土器が多くあり、焼成を受けた扁平な板石や栗石が数点検出されている事から製塩炉としての機能を有している可能性が高い。また、その時には炉底が良く焼成を受けている事から全面的に石を敷設したものではなく部分的に石を配した事が想定される。

製塩土器は、近年古墳時代の集落遺跡から出土する例が多く、その編年や流通を取り上げ考察を加える論文も散見する。しかし、根本的な性格を明確にする事は後少しの時間的裕余が必要であろう。当遺跡の製塩土器も内陸部に属する事から流通を考える上で4種類以上の胎土を持つ事は複数の製塩生産地から送られてきた事を物語るものであり、その編年を土器の編年基準と同程度まで細分して各産地との関係を論求していくかねばならない。今回の調査によって遺構内から出土した製塩土器は、多くの須恵器や土師器と共に上述の課題に対して重要な資料となるだろう。

炉-3は、地下式の炉でどのような性格を有するものか明確でないが、炉-2と同様根拠となる遺物はないが鍛冶炉の可能性が高い。埋土中多くの製塩土器が出土している事は、鍛冶工房と何らかの関連が見い出されるかもしれない。

炉-4は、規模も大きく橢円形の地下式炉で底部から側壁にかけて良く焼成を受けている。この炉についてもその性格は明確でない。土師器や須恵器及び製塩土器の出土は、炉-1～3までと同様時期を限定するものとして重要な資料となるものであろう。

6世紀代になると、調査区全域に遺構及び遺物包含層が検出される。土塙、溝、ピット等の遺構が検出され、5世紀代よりも集落に関わる遺構が多くなり住居範囲が拡大した事を示す。また、各遺構内から鉄滓や鞴羽口の鍛冶関係の遺物も普遍的に出土し、鉄器生産集団としての特質をよく表出している。大県遺跡の鍛冶関係遺物の出土密度と比べ割合的には少ないが鍛冶関係集団の集落と考えて大過ないものである。

7世紀代になるともっと活動的な状況が見られる。遺構も土塙、溝、ピットが増加し、それに対応するように遺物量も多い。同時代が最も集落の盛期であると云える。この時期も鍛冶を依然として実施している。

6世紀から7世紀代まで、当遺跡の後背山地である生駒山地に大型群集墳が形成される。割

広い範囲であるが、平尾山古墳群と称し1500基近い古墳を数えている。これらの古墳の中には鍛冶関係遺物が出土する例があり、大県及び大県南遺跡の集落との関係を追求する事は今後の重要な課題である。

7世紀中頃になると、河内六大寺と称される古代寺院が当地域に密集する。この事は各寺院を建立する氏族が多く存在したと云え、鉄器生産だけにとどまらず何らかの技術及び知識又は権力を有した証しである。当調査区の東側300mの位置に大県南廃寺（山下寺）が近接しており、当調査区から出土した瓦も何らかの関わりがあると思われる。また、第1次調査において単弁16葉蓮華文軒丸瓦及び均整唐草文軒平瓦が出土しているが、山下寺出土軒先瓦とは異なったもので、まだ明らかでない大県郡の郡衙跡の候補地として検討の余地がありそうだ。この他にも第1次調査において綠釉土器が出土している事やすぐ西側を流れる恩智川の改修工事に際して墨書土器が採集されている事等郡衙となる条件的な要素も多い。今後、遺構の検出により明確にしなければならない。

奈良時代に入ると遺構や遺物が少ない。柏原市域の古代寺院を擁する集落遺跡では特にその傾向が強い。遺構も少なく出土遺物の量も極端に減少し、集落自体衰退していく状況が伺われる。当調査区周辺の集落も居住区が移動したのではなく集落の規模が縮小していた結果と考えられる。

奈良時代以降は、土層観察から水田耕作に利用されている以外の遺構はあまり検出されていない。水田耕作については、利用開始時期は奈良時代以降であるのかある程度の年が経過して、後なのか問題である。今回の調査では調査面積が少なくさらに多くの調査事例が必要であるが敢えて言うならば9世紀以降から耕作されていた可能性が高い事を述べておこう。現在の地形から条里地割をみれば、大県郡の北部域によく条里地割が遺存して南部域はあまり整然としない。条里地割の基線は、南北方向が東高野街道で里線となり、東西方向の条線は不明確である。

鎌倉時代以降になると、溝や道状遺構の水田関係の遺構がみられ、この時期も遺跡の状況はほとんど判らないが、出土遺物は少なく、須恵器、土師器、瓦器、瓦等の細片や杭、牛の鼻輪（木製）等がみられるのみで集落から少し離れた地帯であった事が伺われる。この時期に後続する遺物として15世紀頃の瓦質甕を検出した。この時期まではほぼ水田として利用されていたようである。

1985年度市内遺跡群発掘調査一覧

平野 遺 跡

(1985.1.1~12.3.1)

年次	所 在 地	面 積 m ²	申 請 者	用 途	区 分	担当	調 査 期 間	調 査 概 要
85-1	平野2丁目476-13	100.0	上 村 和 彦	個人住宅建設	国 庫	北野	10.19~10.21	GL-1.8mで、土師器、須恵器等出土。

大 県 遺 跡

84-5	平野2丁目12	39.325	柏 原 市	下水道管布設	公 共	北野	1.9~1.14	GL-1.0mまでに、縄文、弥生、土師器、須恵器等出土。
84-6	平野2丁目11-28	48.0	柏 原 市	下水道管布設	公 共	北野	1.18~1.19	縄文、古墳時代の遺物包含層検出。
85-1	平野2丁目261	54.85	柏 原 市	下水道管布設	公 共	北野	4.22~4.23	遺物、遺構なし。
85-2	平野2丁目1-5	9543.759	柏 原 市	体育館建設	公 共	北野	6.5~8.27	弥生、古墳、奈良時代の遺物、遺構を検出。特に7C代の鍛冶関係遺構。
85-3	平野2丁目10	88.0	柏 原 市	下水道管布設	公 共	北野	11.8~11.13	縄文時代—中世の遺物を検出。

大県南遺跡

85-1	大県4丁目18	222.6	柏原市建設部	水 路 築 造	公 共	北野	2.6~2.22	古墳時代の炉跡、焼土塙等検出。土師器、須恵器、特に製塩土器多量に出土。
85-2	太平寺2丁目547-8	282.61	松 岡 茂	個人住宅建設	国 庫	北野	10.18	遺物、遺構なし。
85-3	大県4丁目426・427-1他	392.42	柏原市建設部	道路幅拡張	公 共	北野	11.15~12.17	奈良時代～中世の土師器、須恵器、瓦、瓦器等を検出。

太平寺・安堂遺跡

85-1	太平寺1丁目144-1他	453.7	柏原市水道局	水 道 管 埋 設	原因者	田 中	3.12~3.23	奈良時代～中世の遺物包含層。奈良時代の方形掘立柱、溝等を検出。
85-2	安堂町968-1	1485.66	高 井 利 造	共同住宅建設	原因者	竹 下 桑 野	85.12.4 ~ 86.2.22	縄文時代～中世の遺物、遺構を検出。特に奈良時代の建物群と木簡6点出土。
85-3	太平寺2丁目21-5	36.0	柏 原 市	下水道管埋設	公 共	北野	11.20~12.5	遺物、遺構なし。

家原寺跡

85-1	安堂町639、640	203.28	中 村 忠 雄	個人住宅建設	国 庫	北野	4. 1	近世の池。磁器出土。
------	------------	--------	---------	--------	-----	----	------	------------

高井田横穴墓群

85-1	高井田256-1他	7368.0	柏原市建設部	河 川 改 修	公 共	安 村	1.21~1.31	壺形埴輪、土師器、須恵器、弥生時代の石器等出土。
85-2	高井田282他	13800.0	柏原市建設部	河 川 改 修	公 共	安 村	3.6~3.30	土師器、須恵器、磁器出土。特に祭祀遺物が多い。

年次	所 在 地	面 積 m ²	申 請 者	用 途	区 分	担当	調 査 期 間	調 査 概 要
85-3	高井田645-3他	3200.0	柏原市建設部	市道新設	公 共	安村	6.24~8.13	横穴墓10基検出。金環、玉類、須恵器等副葬品多数出土。

平尾山古墳群

85-1	高井田235他	5100.0	高井田土地 区画整理組合	土 砂 採 取	原因者	安村	4.2~6.6	古墳2基(切石積、凝灰岩使用)、7C代の建物を検出。
85-2	高井田178他	10000.0	高井田土地 区画整理組合	区 画 整 理	原因者	安村	85.10.1~ 86.1.31	奈良時代以降の掘立柱建物群 を検出。
85-3	雁多尾畠2000-1他	166803.0	御堂開発株	靈 園 開 発	原因者	田中	85.10.28~ 86.2.8	横穴式石室、小石室古墳多数、 木椁墓等多数。 古墓から和同開珎銀銭出土。

田 辺 遺 跡

85-1	国分本町6丁目1443-1 1444	360.73	乾 利 男	個人住宅建設	国 庫	田 中	7.8	G L-40cmで地山。遺物、遺構なし。
------	-----------------------	--------	-------	--------	-----	-----	-----	----------------------

玉手山遺跡

85-1	片山町10-1・2, 29-1	1127.56	西 村 義 郎	マンション建設	原因者	安村	2.7~2.23	奈良時代のV字溝を検出。
85-2	玉手町145-165	967.95	八 幸 産 業(株)	分譲住宅建設	国 庫	田 中	9.4	遺物、遺構なし。
85-3	玉手町145-33	844.4	増 田 恒 敏	宅 地 造 成	原因者	桑 野	12.11~12.12	遺物、遺構なし。

原 山 遺 跡

85-1	旭ヶ丘3丁目1077-1	297.08	永 井 康 章	個人住宅建設	国 庫	北 野	2.1~2.5	中世の溝を検出。土師器、須 恵器、瓦等出土。
85-2	旭ヶ丘3丁目4750他	1200.0	玉 手 山 学 園	体 育 館 建 設	原因者	田 中	9.9	遺物、遺構なし。

松岳山古墳群

85-1	国分1665	400.0	裏 山 弥 太 郎	範 囲 確 認	国 庫	竹 下	7.17~8.25	竪穴式石室。銅鏡、腕飾類、 鐵製品出土。 松岳山古墳前方部裾を確認。
------	--------	-------	-----------	---------	-----	-----	-----------	--

誉田山古墳群

85-1	旭ヶ丘4丁目4986-170 他	1682.53	木 下 秀 夫	テニスコート 造成	国 庫	田 中	3.11	遺物、遺構なし。
------	---------------------	---------	---------	--------------	-----	-----	------	----------

河内国分尼寺跡

85-1	国分東条町2579-2	688.14	安 尾 公 一	個人住宅建設	国 庫	安 村	8.28	遺物、遺構なし。
------	-------------	--------	---------	--------	-----	-----	------	----------

図版



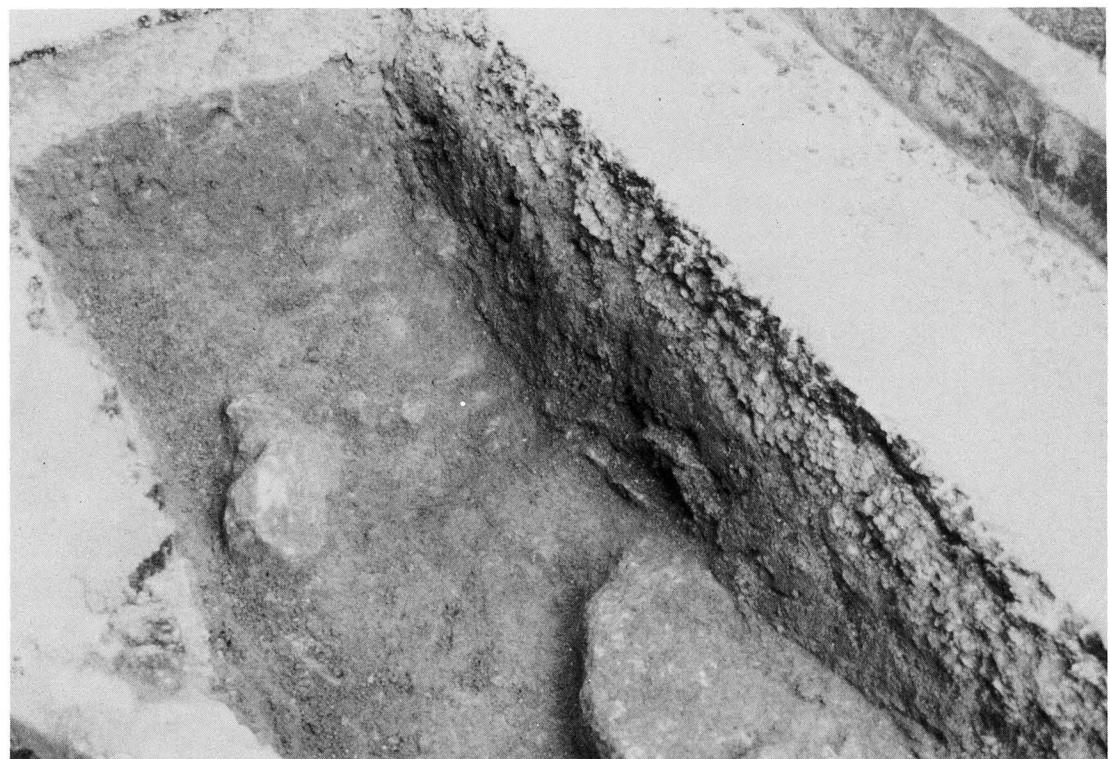
調査区北側の若倭彦神社



A区全景



A区トレンチ



C区トレンチ



B区トレンチ



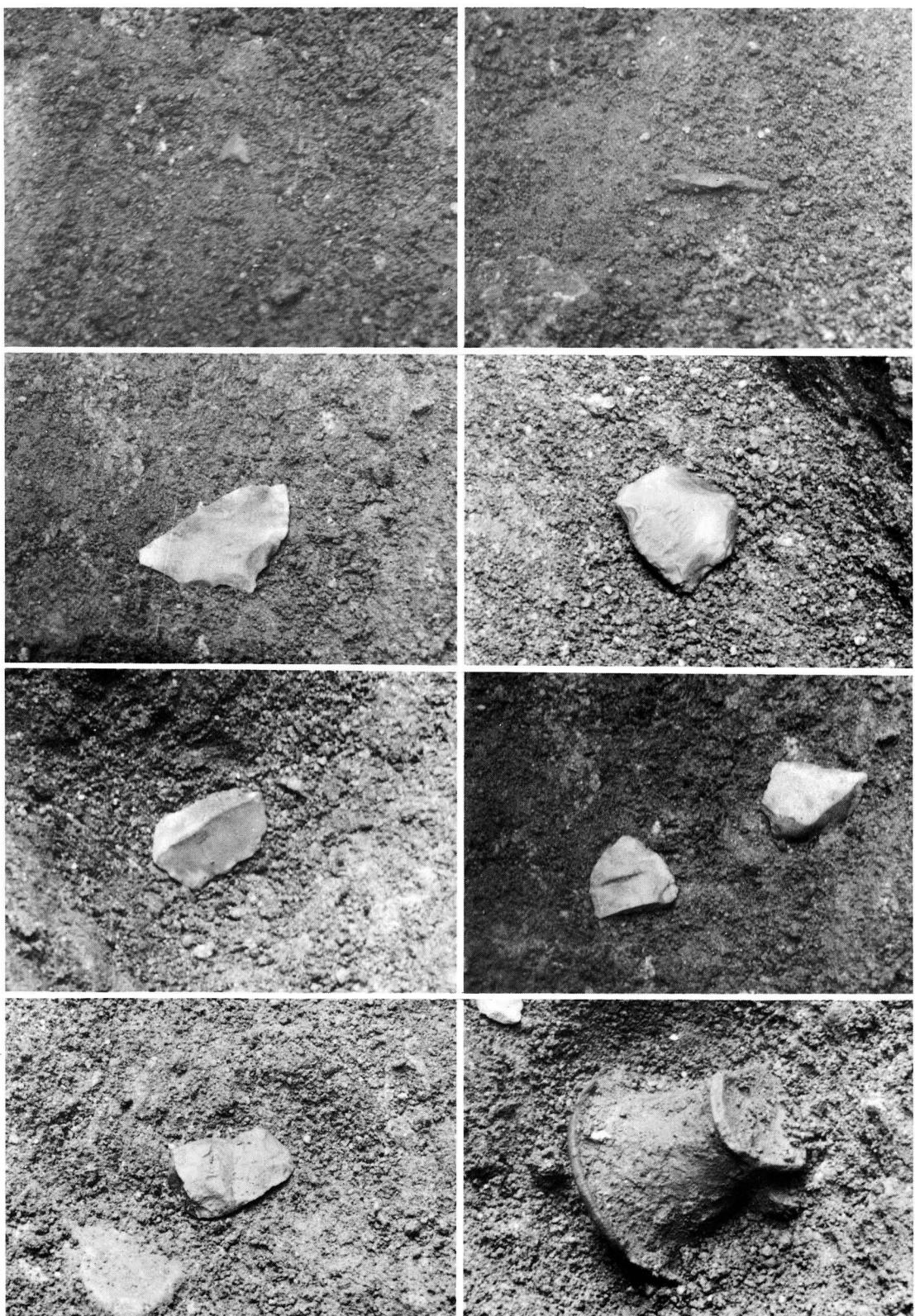
C区トレンチ



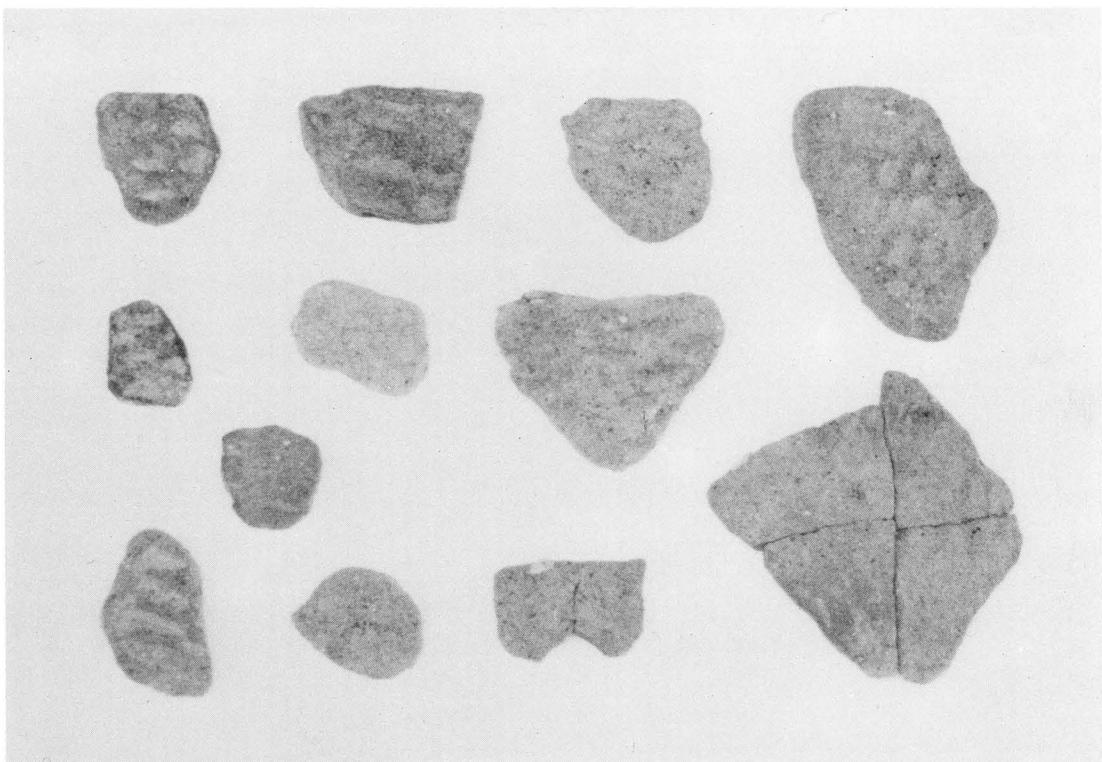
C区トレンチ



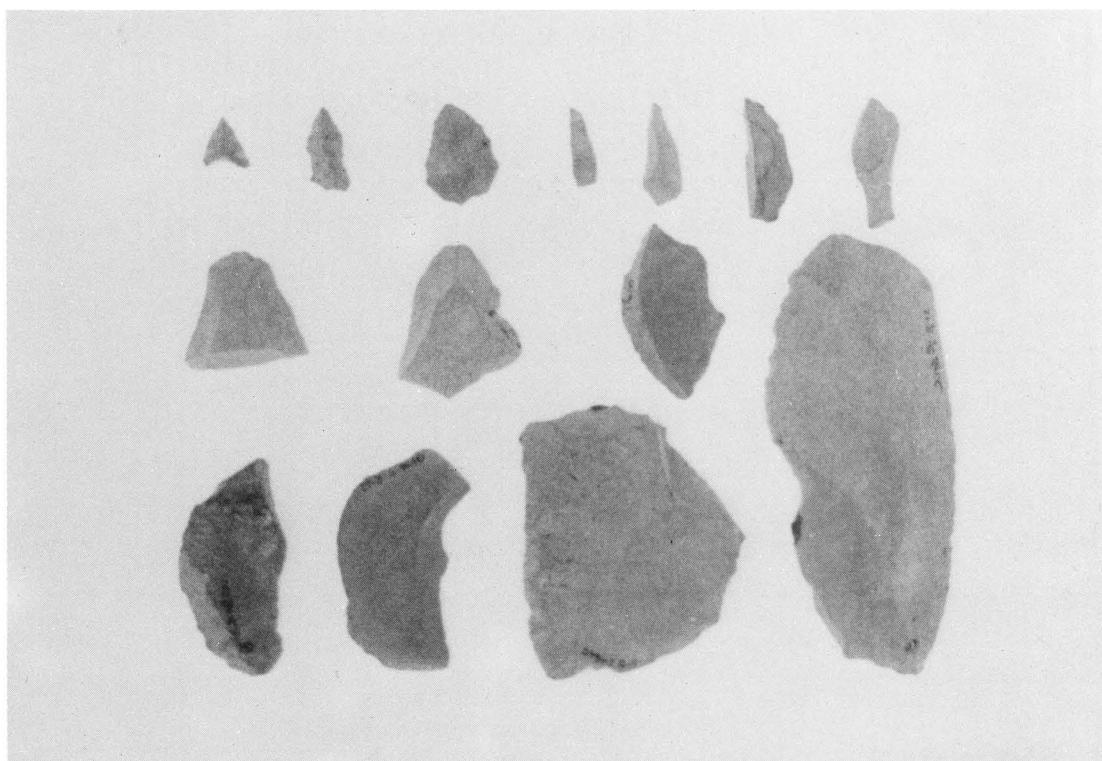
D区トレンチ



遺物出土状況



出土遺物



出土遺物



C区トレンチ



A区トレンチ



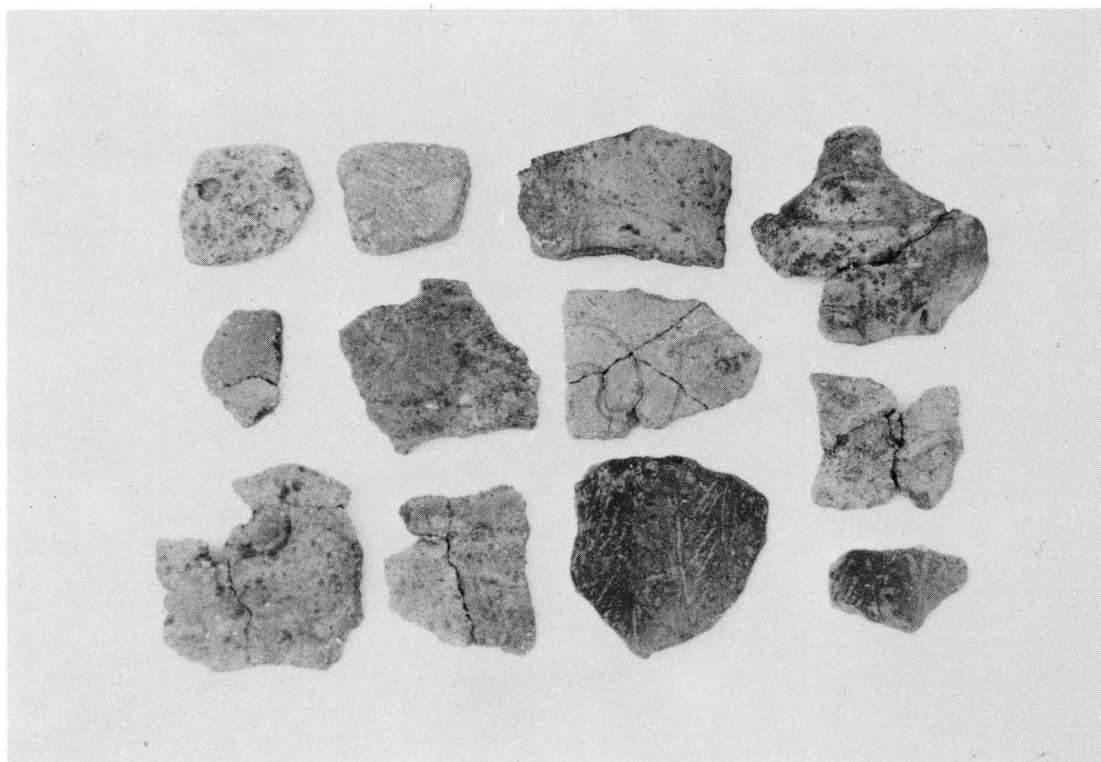
C区トレンチ



D区トレンチ



遺物出土状況



出土遺物



炉-1、2、3



炉-1、2、3



炉—1 全景



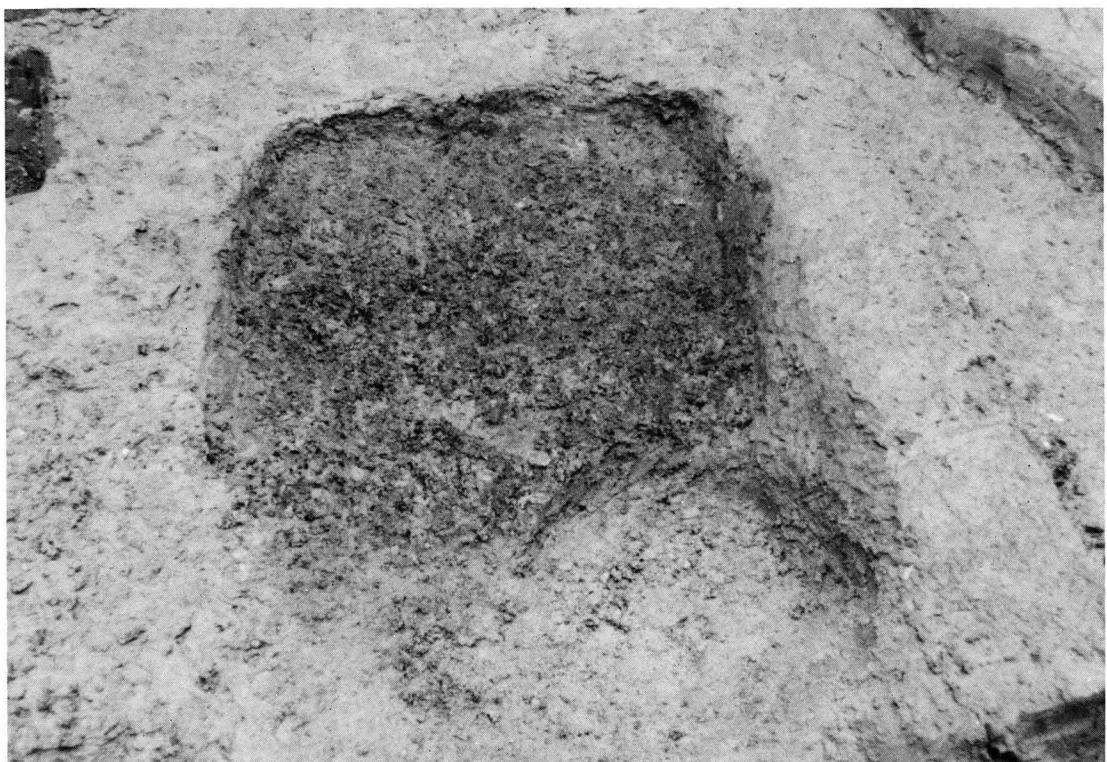
炉—1 遺物出土状況



炉—2 遺物出土狀況



炉—2 遺物出土狀況



炉-2 全景



炉-2 検出作業



炉-2 立割り断面



炉-2 立割り断面



爐—2 全景



爐—2 遺物出土狀況



炉-4 遺物出土状況



炉-4 作業風景



炉-4 セクション



炉-4 遺物出土状況



炉-4 全景



炉-4 セクション断面



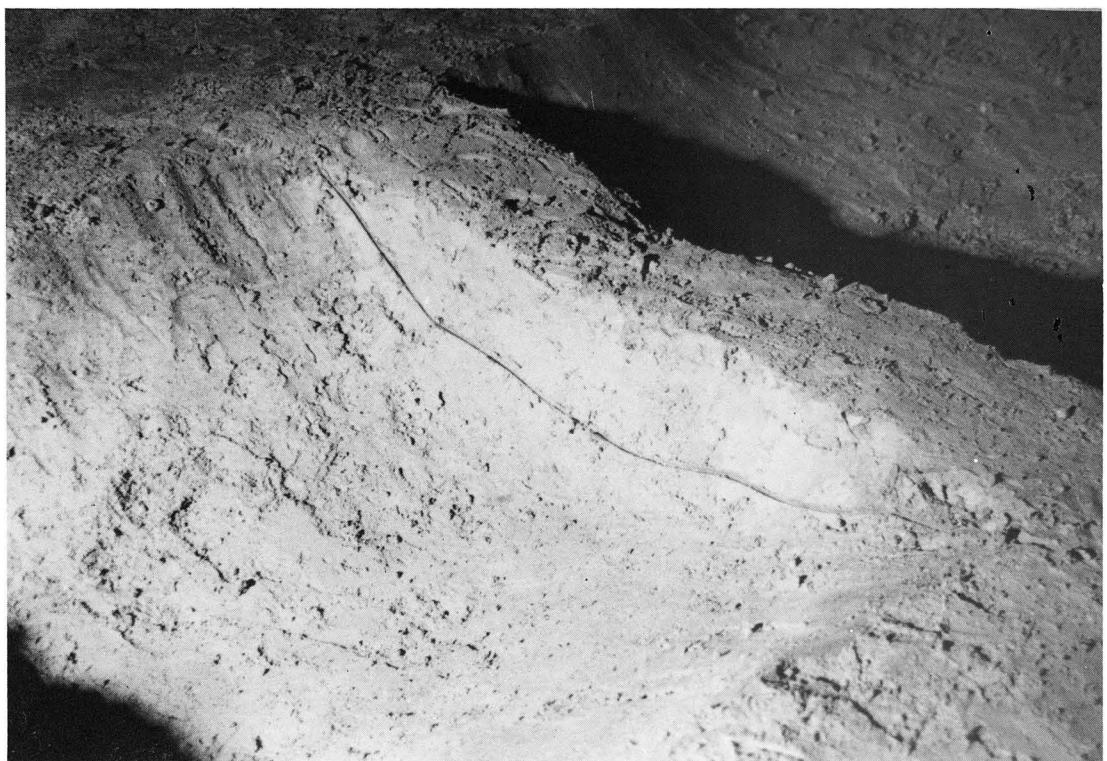
B区版築土層



B区版築土層断面



B区溝 2



B区溝 2 断面



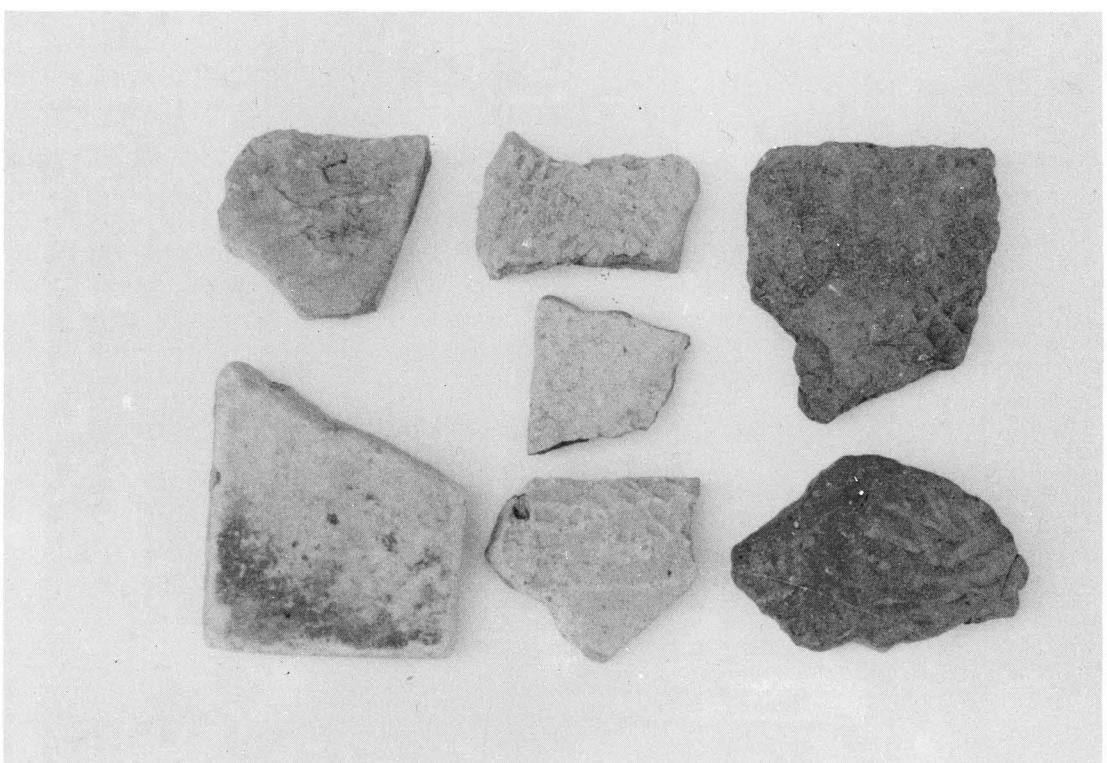
B区全景



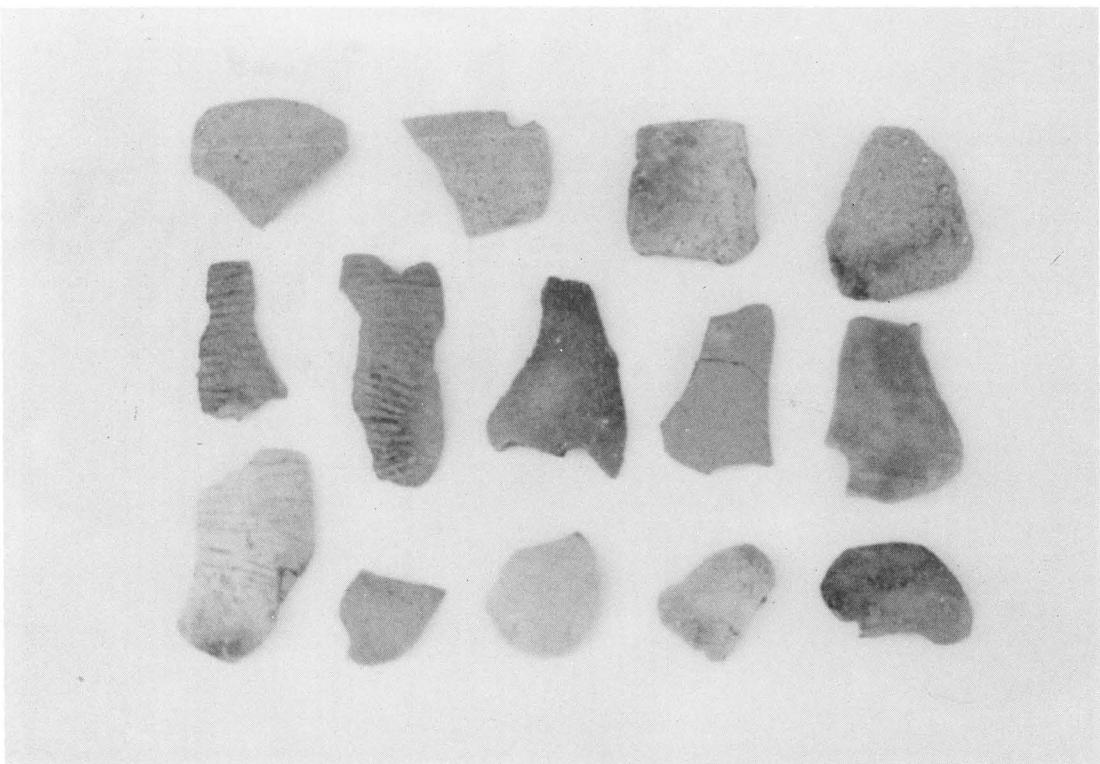
B区土塹-1



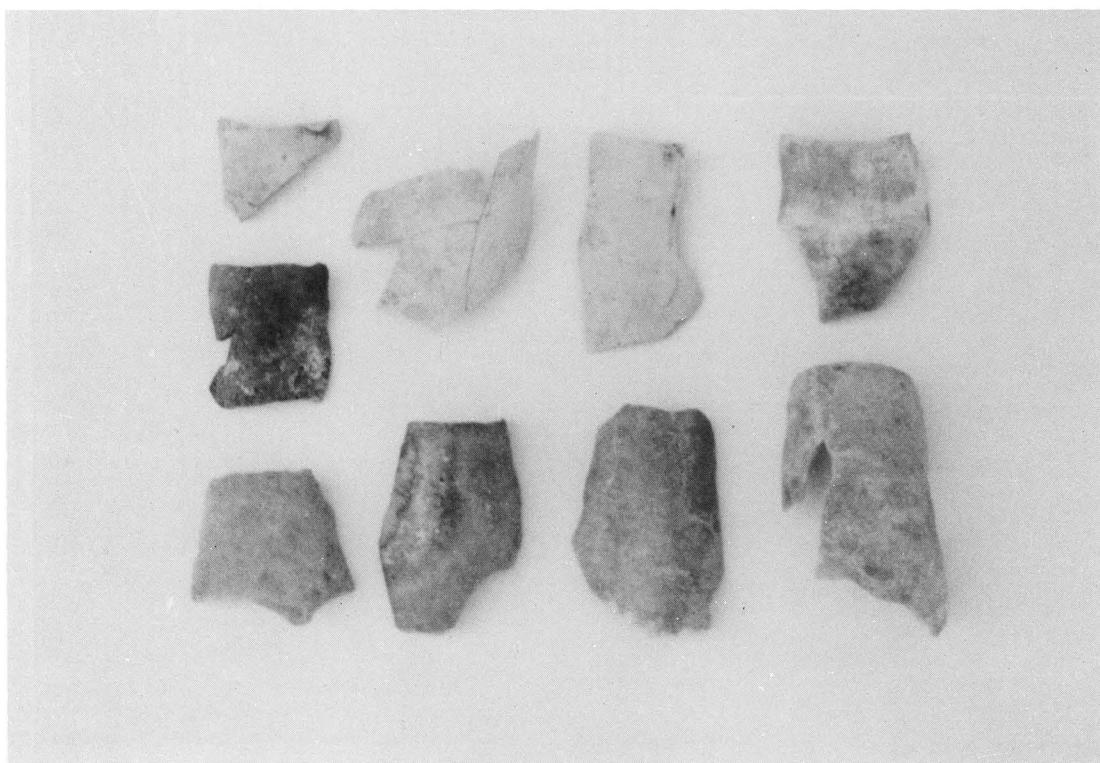
B区土塙 5



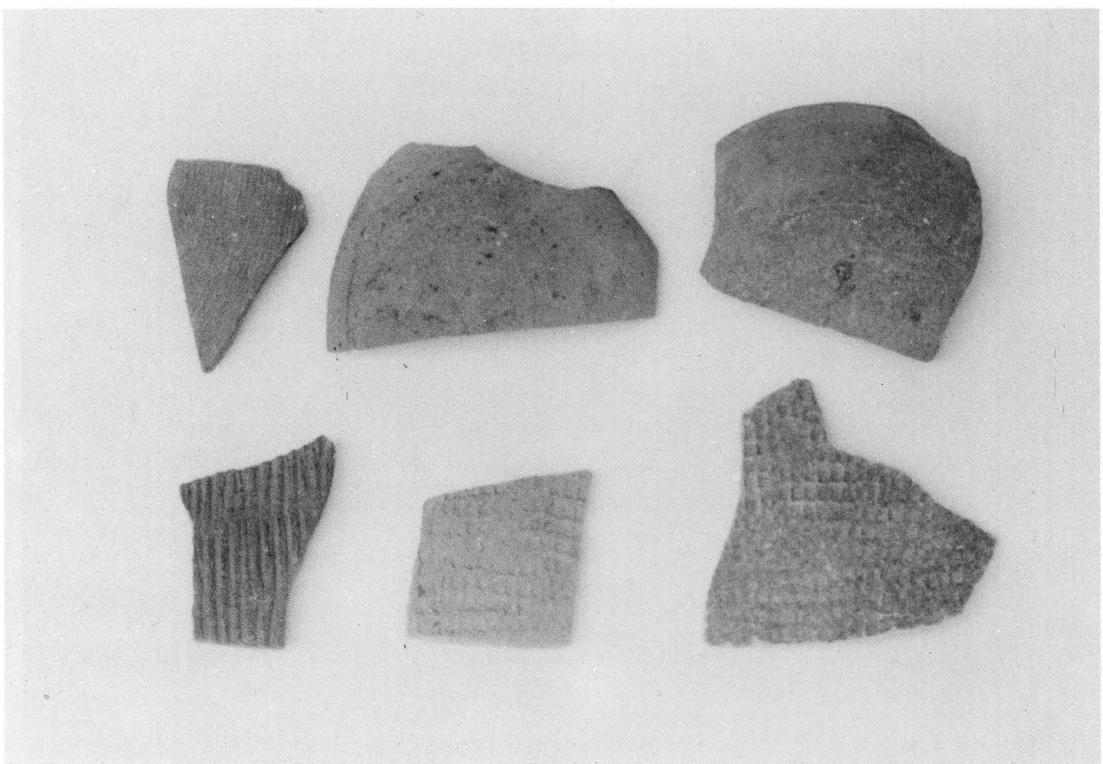
出土遺物（瓦）



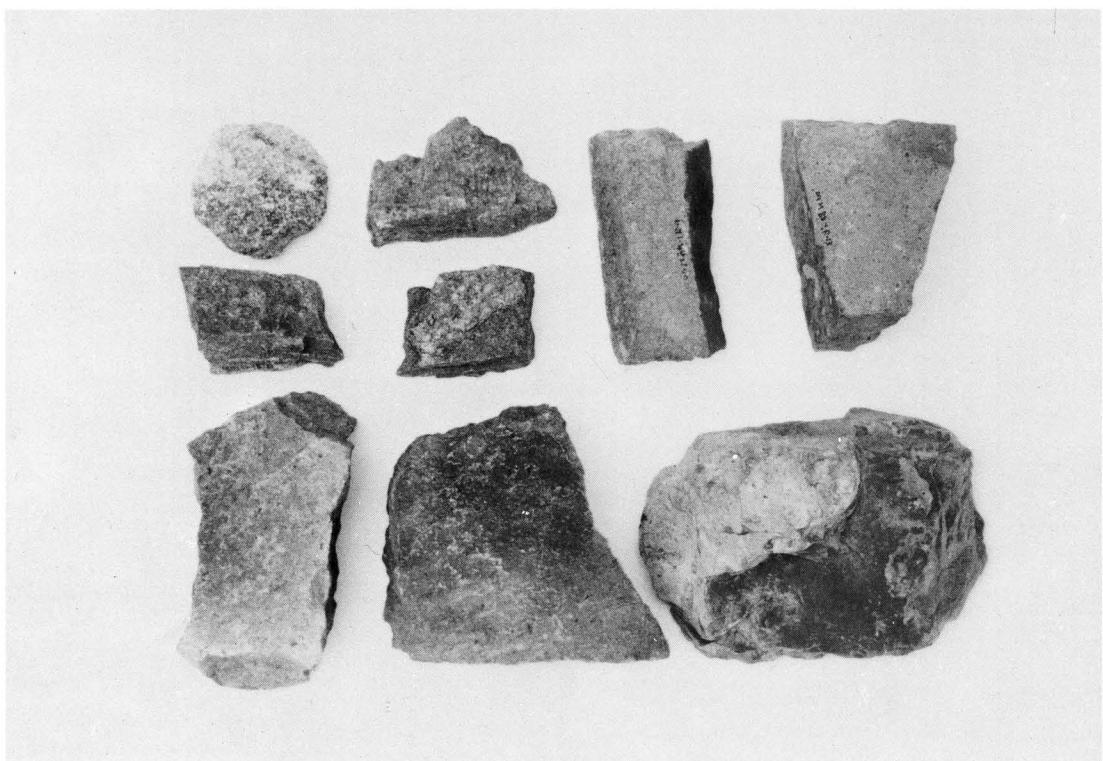
製塩土器



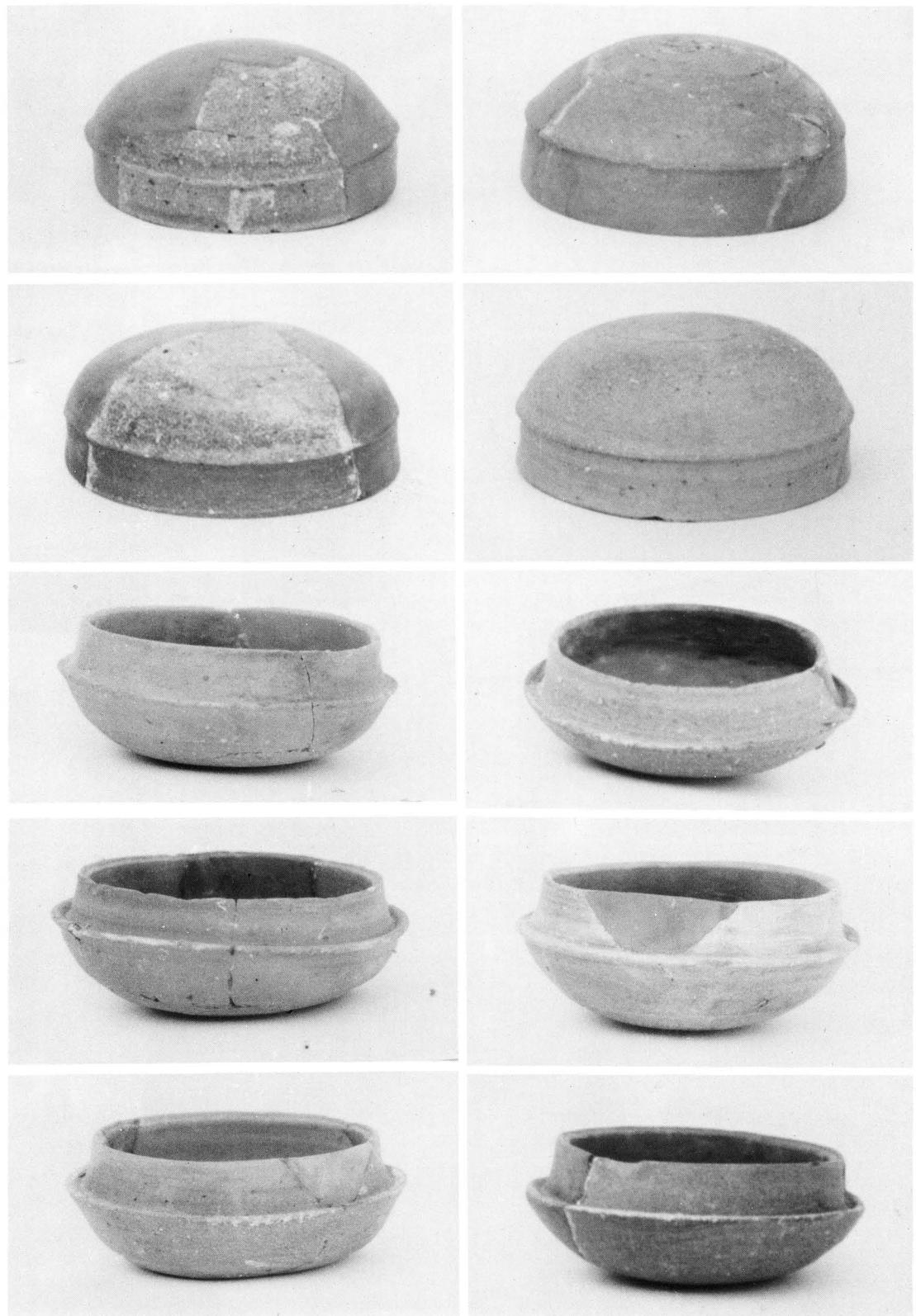
製塩土器



出土遺物



出土遺物



出土遺物



出土遺物



出土遺物

大県・大県南遺跡
——下水道管渠埋設工事に伴う——

編集・発行 柏原市教育委員会
〒582 大阪府柏原市安堂町1番43号
電話 (0729) 72-1501 内716
発行年月日 昭和61年3月31日
印 刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

